

第I章 建学の精神

第1節 建学の理念

1. 理念の確立

本学の建学の理念は、初代学長清沢満之が、1901（明治34）年10月13日、本学の前身である真宗大学の開校式にのぞんで述べた「開校の辞」に明らかにされている。その理念が大学令にもとづく大学組織と研究・教育活動の上に具体的に確立された様は、第三代学長佐々木月樵が、1925（大正14）年5月1日、大谷大学の入学宣誓式において述べた訓辞・「大谷大学樹立の精神」に詳らかである。

今ここに、その「開校の辞」と「大谷大学樹立の精神」の全文を掲げれば以下のとおりである。

〈開校の辞〉

本日は、当真宗大学新築移転の式を挙ぐるに際し、広く朝野の諸氏の御高来を忝うし、茲に盛大なる式典を行ふを得たるは、洵に私共の光栄と存じます。

就いては本学は今日こゝに始めて開設したのではなく、元京都にありましたのを此処に移して校舎のみ新に建築したものであります。その概略は真宗大学要覽に就いて御覽下された通りであります。唯だ其の大體に就いて申し上げますことは、本学は他の学校とは異なりまして宗教学校なること、殊に仏教の中に於いて浄土真宗の学場であります。即ち、我々が信奉する本願他力の宗義に基づきまして、我々に於いて最大事件なる自己の信念の確立の上に、其の信仰を他に伝へる、即ち自信教人信の誠を尽すべき人物を養成するのが、本学の特質であります。而して本学は予科二年本科三年と分れて、都合五箇年の修業で一先づ卒業するのであります。

更に進んで攻究すべき人物を特に選抜して研究院に入れ、三年乃至五年を以て其の業を卒るのであります。又其の科目に至りては、一派に於ける宗学と、及び他の諸宗の教義の学と、最も本学に直接の関係を有する所の須要なる世間の学科とを教授いたします。勿論今日の有様では完全ではありませぬけれども、冀はくば仏祖の冥祐の下に、外は広く内外諸士の賛助を得、内は教職員生徒一同に力を協せ、本学の目的を達したきことであります。

初代学長 清 沢 満 之 (1901年)

〈大谷大学樹立の精神〉

本大学は本学年にて学部及び予科の編成を完了したのである。此記念すべき年に当つて、予は今日予科、学部並に専門部に多数の新学生諸子を迎へ、本日諸子の為めに本講堂に於て、宣誓の式を挙行することは、同慶に存ずる次第である。

本大学は、今を距ること二百五十九年、寛文五年筑紫観世音寺の大学寮を京都枳殻邸に移したのがそもそもの始めである。爾来、長く大谷派本願寺子弟の修道院であつた。今この修道院が時勢の変遷に応じて、正しく学校組織となつたのは明治八年である。その後、同二十七年には大中学の組織を成じ、同三十二年には仏教学の上に諸宗の分科を行ひ、同四十四年には、真宗大学と高倉大学寮とを併合して、真宗大谷大学を設立し、こゝに学校統一の目的は達せられ

た。

徳川時代の修道院は、かくの如く明治時代となつて初めて学校組織となり、外的には学制の上には現に四度までの変更を行ふたのであるが、内的には仏教学等は依然として昔の編制であつた。ところが世は大正となり、内外の思想の上には種々の激変を生じ、何人も教家の任務の重大なることを自覚するに至つた。そこで本大学にては今度こそは学制の根本的改革を断行する必要を感じ、大正七年春以来屢々会議を開き、大正九年遂に現行学制を布き、やうやく今春を以てその学制全部の編成を見たことである。

当初その議に参加し、計らずも今日また乏しきを職を学長にうけ居る已上予は、今日此機を利して教授諸君及び諸子に対して、正しく本学樹立の精神を伝えることは、予の光荣たるのみならず、また自己の正になすべき義務であると思ふ。

そもそも、国民の精神的要素は、いふまでもなく宗教と教育とである。然も、教育は常に宗教を俟つて眞実の人格を作り、宗教は教育によつてのみ常にその陥り易き所の迷信に陥ることを防ぐのである。宗教中、殊に我仏教の如きは、東洋文化の要素であり、また古来我國民の生活を支配したる宗教である。加之、東洋の教学中、今日世界に誇るべき所の無尽の学的要素を有するものは我仏教である。然らば、仏教は本来宗教である已上は、今後もまた宗教としては之を國民一般に寺院の殿堂から布教すべきことは勿論である。それと同時に之を今後また学校即ち教育の方から、正しく学として我國民に普及せしむべきものなることは、今更に言を要せぬことと思ふ。況んや、大正となつてから、我国にては、宗教界といはず、教育界といはず、内外現に之を希望しつゝあるに於てをやである。然るに明治維新後、官公私の大学は今日まで泰西の文明を輸入することのみ忙しくて、未だ内に顧みるの暇はないのである。果して然らば、今日今後我此無尽の法蔵を開いて、広く之を世間に施すものは、正に何れの学校にて之を行ひ、また何人か之をなすべきであるか。

茲に幸ひに、我等の先輩は早く既に心を此事に注ぎ、我等が為めに、今後我等が進むべき所の道を拓いてくれたのである。即ち明治の初年頃は、学内では外書の繙読は厳禁せられて居たので、殉教者闡彰院の如きは学外に護法場を建てて、専ら外国思想の輸入につとめたのである。我図書館にはその時のバイブルや、天路歷程やその他師の手沢本を蔵し、師の寺には、今もなほ建白書に殉教の血の鮮かに附着し居るのを見ることである。近くは我々は図書館の廊下にある所の、師が往復に当に使用した蓑を見てもその苦勞の一端を偲ぶことが出来る。また南條前学長の如きも、早く在英中に研究された梵漢対照の大經の研究も、やうやく三十余年の後に至つて講ずることが出来、宗教哲学もまた清沢前々学長が人知れぬ努力によつて、やうやく学内で講ぜらるゝことゝなつた。然しかゝる先進の努力からして、内外の学問は続々学内に輸入され、梵、巴、西及び諸種の外学もまた公然と今日では何人も自由に之を研究し得るのみならず、前学長の七十の賀の祝の際には既に活字の鑄造から植字に至るまで、万事万端教授及び本学々生の手のみで以て梵文楞伽經を出版し、時にはまた研究の一部分は英文『東邦仏教徒』を發行して、多少にても今日では、仏教の研究を世界に輸出し得るまでに至りしことは、実に同慶至極に存する次第である。されど、我々はこれ位では満足さるべきではないのである。かくの如く大正以来内外の教学は内からも外からも一時に我大学内に講ぜられ、或はまたその諸学の附加し發達し来りしが為めに何日しか伝承の教学と混じ合ひ、修道と研究とが一見相反するが如く見えて、そこにまた世間の人にもまた一時何となく杞憂の念を抱かしめたことである。げに、これら内外の事情を一括して茲に本学は、学制の根本改正を行ふたのである。

本学は、現に綱領第一条に示すが如く、仏教学、哲学及び人文に必要な學術を教授し、並に其蘊奥を攻究するのを目的として居る。既に条文に示すが如くに、本大学が専ら世間の官私大学及び各宗大学等とも大にその趣を異にする点は、本大学は先づ以て仏教学を以て諸学の首位とし、また之を中心として教授し研究する所にある。従ふて、先づ本学の予科には、各高等学校にも、また他の公私大学予科にも見ざる所の仏典基礎学が正しく加はつて居る。即ち第一年には、阿含の積尊と親鸞伝と其教義とを教授する。こは、仏教は常に積尊に始まり、然も宗教としての仏教の極致は正に我真宗にありと確信するからである。この故に新入学生は先づ以て積尊と親鸞聖人とに直面するのである。その後二年三年に亘つては、積尊を糸口に一方華嚴、般若、法華、涅槃と専ら積尊の經典に親しみ行くと同時に、また一方では親鸞聖人の根本經典たる大經、觀經、小經とを明かにし、そこに縦と横との上に密接な關係を保ちつゝ、之によつて学生は一往一切經典の重要なものに直面し得るのである。直面とは、今日までの如くに各宗の註釈の刀に料理された所の經典ではなく、生命の潑刺たるありのままの仏教經典そのものゝ本義に味到することである。少くともこの基礎を完うするにあらずば、何人も学部否な恐らくは仏教の研究に入ることは不可能である。

次に本学々部の仏教学に就ては、少くとも三つの目標を挙ぐることが出来る。第一は仏教を学界に解放したことである。第二は仏教を教育からして国民に普及することである。然しこれらの二大目標は人その人を得るにあらずば出来難いから、第三には、宗教的人格の陶冶に留意することである。今日までの仏教学はその宗その宗に限られた所の宗旨学であつたのである。学問とはいふものゝその実学ではなくして、単にその宗、その派にのみ限られた所の伝持でありまた口訣にすぎなかつた。先に本大学は真宗大学といふたが、その実真宗人は勿論眞の仏弟子を出す能はずして、反つて人をして天台僧、華嚴僧、法相僧の養成学校かと疑はしめたのも、畢竟するに、こはこれ宗教としての諸宗を單位として之を伝承するにつとめて、未だ学としての仏教をば正しく教授せざりしが為めであつたと思ふ。これ即ち、現制度となつて、仏教学は先づ宗としての單位をすてゝ、学としての單位をとりし所以である。即ち仏教全体をば、宗の障壁から解放すると同時に、進んで世出世の学そのものゝ解放にも及んで居る。

若し仏教が唯僧侶の専有物でない已上は、恐らくは仏教学もまたその宗その宗の専有物であつてはならぬと思ふ。即ち仏教が万人の宗教である已上は、その仏教学も、また必ず万人の学たることをそれ自身要求して居る。これやがて、本大学が、仏教を学界に解放し、直接に間接に之を世間に普及するべく勉むる所以である。そのうち、唯一つ宗教として残された所の仏教は、我真宗である。されど真宗はもともと大乘仏教の極致であるが故に、そのまゝまた学として今後益々その研究を深め得るのである。これ即ち宗名を残しつゝ然もまた学名を附するに至りし所以に外ならぬ。

今その真宗学と人文科の名は、大正七年初めて本学々科及びその課程に使用した所の新名目である。予は殊に此真宗学の名が、何日とはなしに数年ならずして早く世間一般に通用さるゝことゝなりしを悦ぶものである。今後、益々学としてその研究が深めらるゝと同時に、またそれが学内のみならず、宗教として世間一般の宗教的人格教養の源泉となり得ることを深く切望して止まぬものである。

本大学では、仏教はかゝる解放的意義に於て先づ以て研究せられて居るのである。そこでかくの如き「法」の解放は、やがてまた「人」の解放を要求するものである。この故に、本学は爾来僧俗共学を断行し、非僧非俗の真宗は、また教育上現制度によつて初めてその意義を確め

たことである。その後卒業生に対して宗教界、また教育界にもそれ相当の社会的資格を得ることを致したのは、正しく本学第二の目的をば、諸子をして容易に達成するが為めに外ならぬのである。そは何れにもあれ、政府所定の大学総則には、人格の陶冶に留意すべしといひ、本学の真宗財団はまた「真宗の精神によつて」といふて居る。本大学は、三分科何れにも真宗学のみは之を必修として、学生の宗教的人格の陶冶に資することゝなつて居るのである。これ已上は、諸子の勉強と修養とに俟つての外はないのである。

泰西の大学中、独逸では学の自由を尊び、仏国では資格を得ることにつとめ、英国では紳士を造り、米国では専ら実益を重んずと、予は一九二一年及び二年に亘つて欧米の大学を視察し、親しくその特殊性を認めしと共に、また何れの国にても有名な大学では、我国に於ける公私大学にては、そこに少しも認められぬ所の共通性の存することを目撃したのである。その共通性とは何であるか。即ち学内に於ける宗教的気分である。之を設備の上でいへば、何れも学内には崇麗なる礼拝堂若くは教会堂を有して居る。学生は土曜の晩、日曜の晨には、こゝに集つて神の栄光を讃するのみならず、また出身者の死後その法諱の壁板に麗はしく刻み付けられて居るのをも見たことである。実はかくあるのが当り前であつて、それらの有名な大学の多くは、私立にして、もともと寺院又は教会等の進展し開放されたものである。即ち、カンタベリーのキングスカレッジは、もとオーガスチンが説法したりし所ソロモン大学は今もなほ、その裏にある所のサンゼネビーヴ寺院の寄宿舎であつたではないか。されば、若し我国にても真に東洋文化若くは、日本独特の、大学が出来得るならば、恐らくは、昔の法隆寺や興福寺や比叡山や高野山の講堂等が、早く進展し国民一般に開放せられて、文化の中心となつて居たならば、必ず日本独自の大学が出来たことであらうと思ふ。されど仏教伝来後有名な伽藍には少くとも、仏をまつる金堂と学問する所の講堂とが建立され、そのうち正しく宗教自体である所の金堂の方は早く国民一般に解放されしが、学問自体である所の講堂の方は永久に鎖されて今日に至つたのである、所が、近来、各宗は競ふて昔の講堂、今の学寮を解放し、盛んに世間一般の大学となすことが流行となつたが、果して之によつて、泰西の様な大学出来るかどうか。思ふに、仏教の解放はたゞ世間に解放するのが主ではなくして、真の解放は、学として之を学界に解放し之を国民一般に普及することではなけねばならぬ。この第一義諦を忘却し乃至、宗教的人格の陶冶をも忘れて、徒らに世間の風潮を追ふのであつたならば、それは宗教学校の破滅であるのみならず、恐らくはまた仏教の滅亡ではなからうか。

されば諸子は今後益々本学に於ける人格陶冶の三 motto たる所の、本務遂行、相互敬愛、及び人格純真の三条に心をよせ、各自純真の人間となつていたゞきたいのである。諸子の学問及び人格の完成が、また本学の完成である。真宗は真をこれ主義とする所の仏教である。真は一般に学の対象たるのみならず、本学に於ては、またこれ人格陶冶の最後の motto である。

今年を以て現制度の我大学は初めて学部及び予科の編成を完成したのだから、諸子と共に大学そのものも初めて大学に入学し得たのである。然らば即ち今日の宣誓式は、そのまゝまた若き我大学の宣誓式である。諸子は我大学自体とは同期入学生であることを自覚せよ、予は一層の自重を祈念して止まないものである。

第3代学長 佐々木 月樵 (1925年)

2. 理念の継承

本学は、初代学長清沢満之によって宣揚され、第三代学長佐々木月樵によって具体化された建

学の理念を、時代の変遷にともなう本学の変革の節目々々にあたって確認し、そのつど理念にあらたな生命をそそぎつつ逆にその生命が理念によって導かれるという仕方で、理念の継承と絶えざる具現化をはかってきた。その時々になされてきた確認継承の具体的事例の一、二をあげれば以下のとおりである。

第1の事例は、本学が戦後の新制大学としてあらたな歩みを始め、大学院博士課程までの陣容を整えおえた1955（昭和30）年に、時の第15代学長山口益が表明した見解・「教学の実践体系としての大谷大学」の要旨である。

第2の事例は、親鸞聖人七百回御遠忌記念事業として図書館の建替え、研究棟の新築、一学寮の移転新築が完了し、1961（昭和36）年、本学があらたな一步を踏み出した時、時の第17代学長曾我量深が全学生を前にのべた訓辞・「大学の父母」の概要である。

〈教学の実践体系としての大谷大学〉

今日大谷大学は、新制大学令による大学であって、そういう制度の枠の中にありつつ、大谷大学本来の使命をはたして行こうとする。すなわち、大谷大学がそういう制度の枠の中にあるということは、一般文化の潮流の中に空気を吸いながら、その一般文化を世俗諦として、そこに勝義諦をたてて行く使命をはたさねばならないということである。

大谷大学は、そういう使命をはたそうとする道をどのように歩いているか、先ずそれについて述べねばならない。結論的にいえば、大学の課題というものは、決して、ただそれぞれの学科の技能者をつくりだすための職業教育、言い換えれば、職人を養成することに終始してはならないのである。それぞれの学科についての知能が断片的に積み重ねられるのではなくして、それぞれの学科の技能において、その学修者の人格が形成せられて行かねばならぬということである。

この点について、私は、前の東京大学学長・南原繁氏が、近ごろある学術新聞に新制大学に課せられている課題について大変適切な言葉を提示していただけるのに注意せしめられた。それを一言に締めくくって言えば、大学の教育は、普遍的な知識の上に立って人間性をつくりあげることであり、しかも、それを成就せしむるについては、宗教がそのバックボーンとしての役目をもつということである。

そういう大学教育の理想なるものは、われわれの大谷大学としては、30年前、本学が旧制の単科大学として出発した当時、すでにその教育理念としてあげられたところのものである。言うまでもなく、それは佐々木月樵先生の著された「大谷大学樹立の精神」の展開するところである。佐々木月樵先生における「大谷大学樹立の精神」は、明治の中葉を少しくだったころ、本学の前々身である真宗大学が東京巣鴨の地区に近世的な大学としての形態組織をもってたてられたとき、時の大学を荷負うて立たれ、明治宗教思想界の明星として輝いた清沢満之先生の抱懐せられた本学独自の教育理想でもあったのである。それ故、佐々木月樵先生における「大谷大学樹立の精神」は、清沢満之先生による本学の教育理想が大正時代の末期のその時代に再認識せられた態のものであったのである。したがって大谷大学としては、今日南原繁氏が新日本の教育理想として唱導せられるような教育理想を、すでに50年来実践してきたるものであり、それこそ本学の伝統精神であって、本学には、そういう伝統精神で培われた多くの先輩が輩出せられてあるのである。

本学のそういう伝統的な教育精神は、本学の専門教育課程に開設せられている講座構成によ

く表示されている。いま、それに若干の説明をくわえて、諸君にこれをよく理解していただきたいと思う。

まず、専門課程には真宗学と仏教学とがおかれている。この両学は、真宗教義の学と真宗以外の余宗の教義の学というように並列的に考えられているのではない。一代仏教を学ぶ仏教学というのは、真宗の歴史的基盤としての学であり、親鸞聖人が、真宗を「大乘無上の法」と名のっている意味を、歴史的な体系として把握しようとするのが、本学における真宗学と仏教学とである。そのことは、先にいう佐々木先生における「大谷大学樹立の精神」に展開せられているところであり、そういう考え方と、その考え方における真宗学および仏教学というその名称は、佐々木先生が非常な苦心と努力とによって到達せられた点である。若しそういう意味から認識せられずして、真宗学・仏教学が一般的に各宗教義の学として把握せられるならば、それは、もはや本学における真宗学でも仏教学でもないものになるのである。

真宗学・仏教学がそういう意味に了解せられるとき、西洋哲学を始めとする諸講座の意味も明瞭に了解せられることになる。先ず西洋哲学を始め倫理・宗教・教育・社会の諸講座について言えば、それらの中には東洋文化に関する講義も若干ふくまれているが、そこに研究せられ講義せられるものの根幹主流は、ひろい意味における西洋哲学思想である。西洋哲学思想とは、言うまでもなく、現在日本の歴史的現実を形成するものであって、いま現代文化といわれているものの実体は西洋哲学思想である。仏教が現代の現実のうちに生きうるがためには、この現実のうちから、この現実を突破して新しい創造力をもったものとして生まれ出る他はない。すなわち、仏教が現代の現実のうちに生きうるためには、西洋哲学思想に媒介せられる他はない。そうでなければ、仏教は現実から遊離し、仏教は生きた宗教としては滅びるほかなく、親鸞聖人のいわれる「大乘無上の法」も過去の遺物、単なる御旧跡となりはてるであろう。西谷啓治教授が清沢先生50回忌法要の公演会でのべられた如く、清沢先生によって仏教が新しく生きる曙光を見いだしたということは、西洋哲学思想が清沢先生の求道を媒介的に貫通したからである。本学における西洋哲学思想の諸講座には、そういう歴史的な意味があるのである。

次に、国史学、国文学を始めインド学にいたる諸講座は、ひろい意味において東洋文化に関する諸科学である。これらの諸科学に関して、かつての日本では、国史国文の学がいわゆる旧来の国学なる思想に支配せられて、そこに仏教的な要素が考慮せられることもなしに、それらの学問が遂行せられた場合もあった。また東洋史、シナ学についても、儒教が指導的地位をしめて仏教はつけたしといった格好で扱われ去られる場合もあった。しかし、近代フランスの東洋学が産んだ稀代のインド学者・故シルヴェン・レヴィ先生の如きは、「西洋の文化がキリスト教を離れて理解せられず、近東の文化がマホメット教なしに理解せられないと同様に、東亜の文化は仏教を離れて理解せられえない」と主張し、西洋の学者はいずれもその考え方の線に沿っている。現代世界において東洋研究は重要な位置をしめているのである。ギュイメイ博物館々長であったルネ・クルセツは「新ヒューマニズム」の結論において、新ヒューマニズムを建てるためには仏教の「無我」が偉大な役目をなすべきであると強調している。それら西洋の学者から眺めるならば、国史国文の学も東洋学の圏内に包括せられるが、日本人には、もとより別な意味をもつべきであるから、本学においても、それらは東洋諸講座から別出せられている。国史学は、以前、日本仏教史とは別建ての講座であったのであるが、上にのべたような意味において、日本仏教史を国史学の第二講座とし、日本史が仏教を離れては成立しえない点を

表明することとなったのである。

次に、従来は中国仏教史を東洋学、シナ学と別建てした形態に置いていたのであるが、上のべたような立場から、いまは、東洋史、シナ学、インド学と一連の關係に置き、それを東洋講座と名づけ、東亜における仏教の文化史的展開を眺めて、仏教展開の文化的基盤を研究するという役割をはたそうと考えたのである。それによってインド学講座なるものが、国立大学におけるような仏教を中心としたインド学あるいはインド哲学講座とは異なり、別な意味内容を有するものであることが明らかとなるであろう。そういう仏教展開の文化史的研究面をもつということは、仏教なるものが、決して空中の蜃気楼のように歴史から浮き上がったものではなく、地上の文化と深い関連をもつのみか、どれ程に東亜の文化に影響をあたえ、東亜の精神文化がどれ程仏教によって建てられてきたかを反省せんがためであり、そういう反省なくして、今日および今後の仏教の歴史的展開はとげられないことを確実に認識せんがためである。

終わりに、英文学とドイツ文学との二講座からなる西洋文学講座の意味であるが、英語英文学なるものの意味が現在の日本において、また、世界史の現段階において、どういう意味をもつものであるかは、今さらこれを云々する必要はないであろう。ドイツ語ドイツ文学に関しては、終戦後、これを軽視するとき言辞を弄する者もあったようであるが、永劫の真実の開頭を目指すわれわれ教学人としては、もとよりそうした場当たりの見解に左右せられるべきでない。終戦後の西ドイツにおいて復興の最も著しいものは、大学、博物館などの研究機関であることが、最近、信頼できる学会の報道機関によって報道せられている。われわれはドイツ民族が依然として世界文化の発展に貢献せんとするその意志力のほどを偲ぶべきである。そして、仏教の世界性という問題を考えるとき、西洋文化講座が本学において開設せられている意味の程が理解せられるであろう。

もとより何れの講座に属する学科を専攻するも自由である。しかし、始めに言ったごとく、諸講座とは、個々別々な塾のごときものが羅列的に存在しているという態のものではない。個々の講座の個々の学科を専攻して、分業化され専門化された知識をもつ単なる技能者に墮す過失を犯してはならない。諸講座とは、それぞれの講座を専攻しつつ、その講座を中心とした普遍的な知識の上に立って人間を作りあげるものであることが忘れられてはならない。その人間を形成してゆくについては、先に言うがごとく、宗教がバックボーンとならねばならぬ。本学においては、その宗教が涵養せられるための道として、真宗学や仏教学の専攻者にはもとより、何れの講座が専攻せられるについても、かならず真宗学・仏教学の何単位かが履修せられねばならぬことになっている。すなわち、仏教的人格の完成が期せられる機構になっている。かくして本学は、南原繁氏が唱導せられるごとく新制大学の教育理想が実現せられる道をすでに厳しく実践しているのである。少なくとも、現代における仏教者は、そういう組織機構の雰囲気の中に形成せられるものでなければならぬのであろう。

そういう組織機構をもつ本学がその研究と学修において目指すものは、単なる学問ではなくして教学である。これは、われわれが明確に認識しておかねばならない点である。

この教学という語は、戦争時代以来よく世間で使用せられるようになったものであるが、この語は、実は、佐々木月樵先生が、本学の学問が単なる学と区別せられるべき意味において特に強調せられた語なのである。新制大学の教育理念が南原氏の所論のごとくば、大学の教育は、佐々木先生の言われる教学でなければならぬということである。教学が教と学の二字で構成せられている関係上、自ずからそれを分けて考え、学中心か教中心かなどという論議がある

でもあろう。しかし、もし大谷大学が単なる学を学修するに終わるならば、多くの新制大学が続出してきた今日、大谷大学などが存在する意味はない。また、もし教こそが根幹であって学問などは宗門としては第二義であってよいというならば、真宗は学などの義せられる必要のない、ただ信仰ばかりに熱をあげている新興宗教に転向すればよいのである。

仏教なるものは本来、佐々木先生の唱導せられるごとき教学であったことを此処にもう一度反省したい。教学の教は、教のままに信順してそれを行じ実践する意味において、それを行と行ってよいであろう。教中心か学中心かと言われることは行中心か学中心かという論議ともなりうるのである。しかるに、仏教の正しい実践である菩薩行は、正行とも正修とも訳せられる行学一如の修習・pratiipatti あるのみである。この語は菩薩の自利利他の正行として示されることもある。これは、真宗でいう自信即教人信である。仏教が身に修められ仏教が身につく道はこの他にありえない。もともと釈尊は、いたづらな理論、無益な論議にふけることをいまして実践の標識を高くかかげられたと言える。釈尊のかかげられた実践道としての八正道は、正見、正思惟に始まり、正しい学解をもって出発している。学を軽視した単なる教、それに対する熱情的狂信的な信念、それに基づくファッション的実践の傾向などというものは、仏教の正しく行なわれた歴史的世界には遂に見いだされないのである。

八正道は正見と正思惟とをもって始まっている。本学の修学課程は、先ずもって、学解すなわち知識の修得に重点が置かれているが、本学の学科課程の意味が正しく身につくならば、その学解は、行学一如すなわち大乘菩薩の pratiipatti (正行・正修行・修習)として、修学者の生涯に実現せられるはずである。それでなければ、大谷大学において修学することの意味が見いだされないのである。

今の時代に関係のない人にむかってならばいざ知らず、今の時代の人間に仏教が了解せられるようになるには、少なくとも、仏教が学問として他の諸科学とともに糾明せられることが必要であり、さらには、今の時代に仏教による他の諸科学の批判的価値系列づけと言うか、仏教の術語でいう「教相判釈」が出来てこなければならぬ。そしてそういうことも、先にのべた教学として、つまり行学一体のものとして成就せられるものでなければならぬ。世界は大谷大学にそういう課題をつきつけている。

第15代学長 山口 益 (『文化と伝統(-)』、1955年 概要)

〈大学の父母〉

そもそも本学は清沢満之先生を父とし、南条文雄先生を母として生い立ってきたのでございます。清沢満之先生については、信頼する人もあり誹謗する人もあるのですが、南条文雄先生に対しては何らの批評などはなかったもので、そんなところから、清沢先生のお名前は諸君もみな知っておられるでしょうけれども、南条先生については諸君の中にあまり深い印象がないだろうと私は思います。

昔は真宗大学と称した本学を、清沢先生は、東京へ移すことに尽力されたのであります。清沢先生は、皆さんも知っておられるであろうが、本山の改革運動ということをやられたのであります。その当時私は学生でありましたが、真宗大学の全学生が清沢先生の宗門改革の運動に参加したのであります。しかしこの運動は、大体は失敗にきした。こういう訳で清沢先生はいろいろと考えておられたのであらうと思います。

その当時の宗務総長であった石川舜台という人は清沢先生を呼んで、「わが宗門の大学を完

全にして、宗門の子弟を教養する力のある者は、宗門を見渡すと、清沢君一人である。それで、宗門大学の教育は君に任さなくてはならぬ。是非これを引き受けてくれたまえ」という意味のことを言われた。その時、清沢先生は静かに考えておられたのでありますが、その場で、「お引き受けいたします。しかしここに一つの条件がある。その条件というのは、真宗大学を本山の膝元からはなして、日本の首府である東京へ移して欲しい。それが唯一の条件である」と言われた。それで石川宗務総長は、「よろしい、君に任せたかぎりは、この学校を東京へ移したいというならば移すがよろしい。わが宗門はいま多額の借財を荷なっているけれども、移転新築の費用はなんとかして支出するから、心配せずに工事を起こして欲しい」と清沢先生の前に誓われた。こういう訳があって、巢鴨の地に真宗大学というものが誕生したのであります。

顧みれば、真宗大学が大学という一つの学園としての精神と体とを真にそなえたのは、明治34年10月13日、真宗大学東京移転開校式がおこなわれたその日であって、この日に始めて完全なる学園が誕生したと言って差しつかえないと思います。この日に、真宗大学が始めて清沢学長という方を迎えて、宗と体とを完全にし、一つの立派な学園となったわけであります。だから今日でも、10月13日をもって本学の開校記念日と定められているわけであります。

清沢先生のお名前は皆知っているけれども、本学の母であるところの南条文雄先生のお名前はあまり多く知られていないように私は思う。これは甚だ遺憾なことだと思います。東京移転開校当時、南条先生は、清沢先生から見れば、はるかに先輩であるから、清沢先生は、この際是非とも南条先生に学長になってもらわねばならぬと、南条先生を強く推されたのでありました。しかし南条先生はこれを固く辞して、「清沢君、君が引き受けるのが当然である」と言われたので、清沢先生は最初の真宗大学長の任を引き受けられたのであります。だが、清沢先生はもとから呼吸器の病気にかかっておられたためにわずか1年あまりにして退任され、故郷に帰られた。そして翌年の明治36年の6月6日になくなられた。

南条先生はその後を引き受けて、東京に約2年間、真宗大学の学長としてつくして下さったのです。それから真宗大学は京都へ戻ってきて、当時の教学部長の任にあった大谷瑩亮連枝がその真宗大谷大学学長の管掌の任にあたられた。この第二の移転開校式はこの講堂でおこなわれた。その翌年に、南条先生が再び真宗大谷大学の学長の任につかれ、真宗大谷大学がその後昇格して単科大学の大谷大学になる時まで、学長の任についてくださった。前後あわせると17年か18年にもなるのであります。南条先生は清濁あわせ呑むという方であった。清濁あわせ呑むというとは如何にも豪傑のようではありますが、それはいわゆる温良恭儉讓という儒教の徳をそなえておられたということです。それゆえ私は、本学の母であると信じているものであります。

南条先生の後を引き受けた方が、私の友達であり、清沢先生の門弟でありますところの佐々木月樵師であります。佐々木学長は清沢門下であるけれども、その性格はどちらかと言えば清沢先生には似ていない方であって、むしろ南条先生の風格をそなえた、円満な人物でありました。長く真宗大谷大学の教壇に立っていて、いわゆる清濁あわせ呑む雅量を多く持っていた。この人がもっと長命しておれば、この大学は今のようにならなかつたに違いない。今のような状態とは、宗門の一隅に潜在しているというような状態です。しかし、不幸にして佐々木学長が短命にして亡くなったことは、清沢満之先生と同様である。

今日こそ清沢・南条両先生のご精神、佐々木学長が「大谷大学樹立の精神」という一文を残

された、それに学ぶべきであります。多少明瞭は欠けておりますけれども、「大谷大学樹立の精神」というものをよく読めば大体わかると私は思う。とにかく佐々木師がこれを書き残しておかれたのでありますから、教授各位は勿論のこと、学生諸君もこれをよく読んで、本学の使命をよく了解して欲しいと、私は強く念願してやまない次第でございます。

本学はわが宗門の精神力でありたい。わが宗門は宗祖親鸞聖人の700回忌を、ともかく無事に勤め終えた。これから701年の再出発をしなければならぬこの時に、わが大谷大学はその精神力とならなければならない。われわれはよくこの責任というものを忘れぬようにせねばならない。学生諸君にも、これから機会があれば、清沢満之先生のご精神、南条文雄先生のご精神を聞いてもらいたいと思います。どうか学生諸君、しっかり、正しい自信力をもって勉強してくださるようにと、念願してやまない次第であります。

第17代学長 曾 我 量 深 (『大谷大学学報』、1961年 概要)

第2節 伝統を踏まえて

1. 大谷大学の歴史

(1) 大谷大学略年表

西暦	和暦	事 項
1665	寛文 5	東本願寺別邸渉成園内に学寮を創立。
1868	慶応 4	8月、護法場開設。
1873	明治 6	8月、学寮を貫練場と改称。
1874	明治 7	5月、貫練場内に宗学・華厳・天台・俱舎・唯識・外学の六学科を置く。
1888	明治21	2月、学寮の組織を改め専門科・兼学科及び安居とする。
1894	明治27	7月、大学寮を本科、研究科、安居とする。
1896	明治29	6月、学寮を真宗大学と改称。安居を真宗大学寮として別置。
1899	明治32	6月、修業年限を予科2年・本科3年とし、宗乗・華厳・天台・性相の4科を設け、研究院を置く。
1901	明治34	10月13日、真宗大学を東京巢鴨に移転・開学。学監（学長）清沢満之。
1904	明治37	5月、私立真宗大学、専門学校令により認可。
1911	明治44	9月、高倉大学寮と真宗大学とを合して真宗大谷大学と改め、京都に置くことを決定。
1913	大正 2	9月、真宗大谷大学、上賀茂小山の現在地に移転。11月、赤レンガ造本館・講堂、図書館（木造三階建）、学寮（学生寮）落成式。
1920	大正 9	9月、科目名「宗乗」「余乗」を「真宗学」「仏教学」と改称。
1922	大正11	5月、大学令による大谷大学設立認可。
1923	大正12	11月、5000余坪の運動場を新設。
1924	大正13	4月、文学部設置、専門部開設。
1925	大正14	5月、佐々木月樵学長、入学宣誓式において、「大谷大学樹立の精神」告示。
1927	昭和 2	4月、文学部講座制を設ける。
1928	昭和 3	6月、金子大栄、大谷大学教授を免ぜられる。
1930	昭和 5	3月、曾我量深、大谷大学教授の辞表提出。6月、教授会総辞職、学生総退学。
1938	昭和13	4月、日本精神史の講座を加える。
1941	昭和16	2月、学内40数団体を解消して、大谷大学報国会を結成。
1944	昭和19	12月、学内に大谷教学研究所を設立。
1949	昭和24	2月、新制大学として認可。
1950	昭和25	4月、大谷大学短期大学部仏教科発足。
1953	昭和28	3月、新制大学院修士課程認可。
1955	昭和30	4月、博士課程認可。
1961	昭和36	10月、宗祖親鸞七百回御遠忌記念として図書館・研究室棟・洗心学寮を建設。
1963	昭和38	4月、大谷大学短期大学部に国文科新設。
1965	昭和40	3月、1号館竣工。4月、文学部講座制を廃し、真宗学科・仏教学科・哲学科・社会学科・史学科・文学科の6学科制認可発足。
1966	昭和41	4月、大谷大学短期大学部に幼児教育科を新設。
1967	昭和42	4月、自灯学寮開寮。
1969	昭和44	6月、大谷大学共闘会議学生、学監室を占拠。全学ストライキに発展。

1971	昭和46	1月、機動隊導入、授業再開。
1972	昭和47	3月、体育館・部室棟竣工。
1978	昭和53	3月、2号館竣工。
1980	昭和55	4月、貫練学寮開寮。6月、真宗総合研究所開設。
1982	昭和57	8月、旧赤レンガ本館改修竣工。10月、博綜館・尋源館竣工式、研究室棟を「聞思館」、図書館講堂を「聞思講堂」、旧本館を「尋源館」と改称。
1984	昭和59	4月、知真学寮開寮。
1985	昭和60	10月、指定校制推薦入学制度実施。
1986	昭和61	1月、差別ピラ事件。4月、部室棟・柔道場竣工。11月、講堂棟竣工。
1990	平成2	10月、開放セミナー開講。11月、公募制推薦入試実施。
1992	平成4	4月、短期大学部国文科を改組して文化学科を新設。文学部、専門教育一貫カリキュラムを実施。
1993	平成5	4月、文学部に国際文化学科設置発足。
1994	平成6	4月、京都・大学センター単位互換制度による授業を開始。

(2) 大谷大学変遷の概説

a. 東京開学までの歩み

学寮の創設

大谷大学の歴史は、1665（寛文5）年に東本願寺が「学寮」を創設したことに始まる。創設にあたっては筑紫太宰府にあった古刹・観世音寺の学寮が東本願寺の涉成園（枳殻邸）内に移築された。これは当時、新寺の建立が禁止されていたためであったという。『真宗高倉大学寮沿革略』は、「寛文中第十四世塚如上人ノ時ニ至リ一派ノ自衛統一上愈僧叢開設ノ必要ヲ認メシニヨリ筑前国太宰府観世音寺ノ学寮ノ規模ヲ移シ校舍ヲ本山枳殻邸ノ西北ニ創設ス」と伝えている。その後、諸国末寺からあつまる所化（学生）の数が増すにつれて枳殻邸内の講堂では手狭になり、1754（宝暦4）年学寮を高倉魚棚に移し、翌年新しい学舎を竣工せしめた。「高倉学寮」という。この時、学寮の職制（講師、嗣講、擬講）が定められるとともに、夏安居を中心に秋講・春講が設けられるなど、大規模な改革がなされた。高倉学寮はいくどかの火災にあったが、その度に、全国の末寺門徒や大阪を中心とした豪商などの援助をえて復興し、多くの所化を化育しつつけた。例えば、1791（寛政3）年の所化の数は1249人、1838（天保9）年には1847人におよんでいる。

学寮から真宗大学へ

幕末から明治維新にかけて、排仏運動やキリスト教の布教公認など、仏教をとりまく状況には厳しいものがあつた。高倉学寮もこれらの諸問題に直面することになった。学寮ではすでに儒教など外典の研究もなされていたが、このような時代状況のなかでキリスト教の研究が緊急の課題となり、1868（慶応4）年に学寮の分場として高倉馬場の井浪屋敷に「護法場」が開設された。その中心となったのが闡彰院空覚である。そこでは国学・儒学・天学（天文地理）・洋教（キリスト教）の4科が教授された。この護法場で外学を学ぶ姿勢は、時代を見すえた広い視野のもとで仏教を学ぶさきがけとなり、宗門機構の改正を求める大きな流れを生みだした。しかしそれを快しとしない守旧派の刺客によって空覚が暗殺されるという衝撃的な事件が起こった。1871（明治4）年のことである。これによって護法場の活動は事実上終了した。

1873（明治6）年、学寮の名を「貫練場」と改称し、翌年には、春・夏・秋の三季に開講され

る従来の安居と並行する形で、通年の6学科（宗学・華嚴・天台・俱舎・唯識・外学）が開講された。

1896（明治29）年、学寮の研究体制と内容が時代に適した人材養成の実情に合わなくなっていたので、学寮は、三季の安居を中心とする「真宗高倉大学寮」と、年間をつうじて宗門の若い学徒に近代的な教育をほどこす「真宗大学」とに分けられた。

「学寮」から「真宗大学」への道のりは、宗学研修の学場から近代的な研究教育機関にいたる模索の道りであった。

b. 真宗大学から大谷大学へ

開学の辞

1901（明治34）年、真宗大学は東京巣鴨に移転され、その年の10月13日、巣鴨の高台において開校式が挙行された。初代学監（学長）に任命された清沢満之は式にのぞんで「開校の辞」をのべ、いま新たな一步を踏みだした真宗大学は「自信教人信の誠をつくす人物」を養成する「浄土真宗の学場」であるという、真宗大学建学の理念をたからかに宣揚した（第I章第1節の1・「理念の確立」の項参照）。この「学場」は東京府北豊島郡巣鴨村大字巣鴨宮仲に、総面積約22000㎡（6830坪）を有するほぼ正方形の敷地に開かれた。当時その辺り一面は武蔵野の林と田畑で、大学のある高台からは遠く北の方に関東平野の地平線が望めたという。

若い学徒を首都の進歩的な思潮のなかで育てあげようとした清沢ではあるが、明治期に開設された多くの大学が処世の学をほどこす傾向にある中で、彼は、退一步して人生の立脚地の確立をはかる人間を育てようとした。彼のこの理念を示す「知進守退」の句は、当時の法主大谷光演によって書かれ、石碑に刻まれた。現在、本学の正門脇に建てられあるのがそれである。

しかし開校の翌年、すなわち1902（明治35）年の10月、真宗大学学生は主幹関根仁応の排斥運動を起こし、ストライキをなすにいたった。それは、教員免許資格取得の要求をはじめとする処世の方途を求めるものであった。清沢はすべての責任を負って学監を辞し、愛知県の郷里に退いて、翌1903年6月に没した。41歳であった。

清沢の辞職後、真宗大学の学監には南条文雄が任命された。南条は1876（明治9）年にイギリスに留学して近代ヨーロッパの仏教学を修め、いわゆる『南条目録』を始めとする多大の成果をたずさえて帰国し、日本に近代仏教学を確立した人である。本学におけるその後の研究教育は、清沢の残した激しい求道精神と、南条が築いた精緻な批判文献学的方法とを兼ね備え、この両面の時には相補し時には対峙しあう関係の中で、独自の学風をつくりあげて行った。

真宗大谷大学の設立

1911（明治44）年9月、真宗大谷派義制会は真宗大谷派学校条令を定め、高倉大学寮と真宗大学とを合併して「真宗大谷大学」となし、これを京都に置くことを決めた。突然のこの決定に抗議して学監の南条をはじめ、佐々木月樵、曾我量深など真宗大学教職員は総辞職した。同年9月20日に真宗大学の閉校式が行なわれ、10月13日には京都の高倉魚棚の仮校舎において真宗大谷大学の開校式が行なわれた。

真宗大谷大学が、京都府上賀茂村小山と呼ばれた現在地に本館・講堂・校舎・図書館・学寮（学生寮）などの諸施設を新築し、移転を完了したのは1913（大正2）年である。しかし、その前年の2月には、学生41名が旧高倉大学寮の教授ら6名の不信任書を提出して同盟休校に入り、3月には201名の学生が退学処分になるという事件がおこった。こうした事態を收拾するために、1914（大正3）年9月、南条文雄が学長として再び招聘され、大学機構の改革がなされることと

なった。1920（大正9）年、学制を兼修科・専修科・研究科から予科・本科・研究科に改め、各々の修学年限を3年と定めるとともに、「宗乗」「余乗」の学科名称にかえて「真宗学」「仏教学」という名称を初めて用い、さらには、人材を広く学外にもとめて鈴木大拙などを教授に招くといった一連の改革が進められた。

1922（大正11）年5月、真宗大谷大学は、すでに公布されていた大学令にもとづき、予科と研究科をそなえた文学部単科大学となり、大学名も「大谷大学」と改称した。

(3) 大谷大学としての歩み

大谷大学樹立の精神

1924（大正13）年1月、南条文雄を助けて大学改革を推進してきた佐々木月樵が第3代学長になった。同年4月、学則を改訂して文学部が設置され、文学部3学科の専門部が開設された。すなわち、文学部を仏教学科・哲学科・人文学科の3学科に分け、仏教学科には「真宗学、仏教学、仏教史学」、哲学科には「哲学、倫理学もしくは教育学、宗教学もしくは社会学」、そして人文学科には「国史学もしくは東洋史学、国文学もしくは支那文学」、という専攻分野がもうけられた。このような抜本的改革をなし、研究教育体制の新たな陣容を整えおえた佐々木月樵は、翌1925（大正14）年5月1日の入学宣誓式にのぞんで「大谷大学樹立の精神」を告示した。それは、初代学長清沢満之が「開校の辞」に示した建学の精神を体しつつ、大谷大学が、一応、近代的な研究教育体制を整えおえたことを学の内外に宣言するとともに、その新たな体制を駆使して、仏教を広く学界に解放し、近代教育をとおして仏教を国民に普及し、よってもって宗教的人格の陶冶をはかるといふ本学の存立理由を宣揚したものであった（第I章第1節の1：「理念の確立」参照）。

このようにして大谷大学の礎をきづいた佐々木月樵ではあったが、彼は、告示をなした翌年、1926（大正15）年の3月に、学長職なかばにして没した。50歳であった。

激動の中で

佐々木月樵を失いながらも、大谷大学は、彼の告示した「大谷大学樹立の精神」のより一層の具現化にむけて歩みつづけた。その左証の一端は、例えば学制の面では、1927（昭和2）年に講座制を導入して、先の3学科8専攻を3学科11講座に拡充整備したことに、また研究業績の面では、西洋哲学を媒介として仏教を問いなおそうとした金子大栄著『浄土の観念』の出版（1925年）をみたことに窺えるであろう。

しかし、1928（昭和3）年に金子大栄の著作が異安心に問われ、金子は同年6月に大谷大学教授職を免ぜられた。さらに1930（昭和5）年には、曾我量深までも辞任に追いこまれるにいたり、教授会は総辞職し、学生は総退学するという事態になった。これは、大学を教団に奉仕させようとする圧力と学の自由を確立しようとする運動との衝突であった。

このような教団と大学との間の抗争は、しかし、より大きな時流の中に呑みこまれていった。いわゆる15年戦争の始まりによる国家体制の強化である。すなわち、

1938（昭和13）年、全国の大学と同じく大谷大学も「日本精神史」の講座を設置。

1939（昭和14）年、大谷大学学生勤労報国隊が「満州・北支」に出発。

1941（昭和16）年、学内の諸団体を解消して大谷大学報国会を結成。

戦時体制の強化は、当然、大谷大学ばかりではなく真宗大谷派教団全体に多大の難事を負わせた。この困難な時局に対応できなくなった教団と大学はこの年の11月に曾我・金子の両氏を大谷大学教授職に復職させた。

- 1942（昭和17）年、専門部に興亜学科を設置。
- 1943（昭和18）年、学生・生徒の徴兵猶予の全面撤廃により、大谷大学も学生を戦場に見送らねばならぬこととなる。
- 1944（昭和19）年、「大谷教学研究所」を開設（12月）。これは、学生のいなくなった大学を研究機関として維持しようとする努力のあらわれでもあった。

新制大学として

敗戦後、日本国憲法が制定され、1947（昭和22）年に教育基本法と「6・3・3・4制」の学校教育法が定められた。翌年2月には大学設置基準が決定された。大谷大学でもこの基準にもとづく新制大学認可への準備をすすめることになった。しかしその時大谷大学は戦争協力者の教職追放（GHQ 指令）という問題に直面した。1949（昭和24）年2月、大谷大学は新制大学としての認可をえたが、他方では、曾我・金子をふくむ4名の教授を教職追放到に処す（同年6月）という犠牲をはらわねばならなかった。曾我・金子が名誉教授のかたちで復職したのは1951（昭和26）年の12月であった。

その後、1960年代後半までの大谷大学の歩みは、短期大学部および大学院の新設拡充を中心とする新制大学としての整備充実の歩みであった。すなわち、

- 1950（昭和25）年、短期大学部の学則を制定し、仏教科を開設。
- 1953（昭和28）年、大学院修士課程を設置し、真宗学・仏教学の2専攻を開設。
- 1954（昭和29）年、大学院修士課程に哲学・仏教文化の2専攻を増設。
- 1955（昭和30）年、大学院博士課程を設置し、真宗学・仏教学の2専攻を開設。
- 1956（昭和31）年、大学院博士課程に哲学・仏教文化の2専攻を増設。
- 1961（昭和36）年、親鸞聖人七百回御遠忌記念事業として新図書館、研究棟（現在の聞思館）を建設。
- 1963（昭和38）年、短期大学部に国文科を新設。
- 1965（昭和40）年、教室校舎1号館を建設。文学部の講座制を廃し、真宗学科・仏教学科・哲学科・社会学科・史学科・文学科の6学科制に改制整備。
- 1966（昭和41）年、短期大学部に幼児教育科を新設。

戦後の高等教育は、科学技術の発展と経済活動のグローバル化にともなって、世界的に大衆化の傾向を強めた。日本においてはその傾向が特に著しく、高まる進学率を背景にまさに雨後の筍のように多くの新制大学が生まれ、また大半の既存大学は入学者をふやし学部を増設して肥大するという、いわゆるマンモス化の道をたどった。そのような時流の中で、大谷大学でも、学部増設による総合大学化の方向が真剣に検討された時期があった。しかしその時にも、清沢満之の「開校の辞」に示された建学の理念に立脚して、どこまでも佐々木月樵の「大谷大学樹立の精神」を体して進むべきことが確認され、大谷大学は、伝統の地を動かず、文学部を中心とした文科系単科大学としてその内容の一層の充実をはかって行く道を選択した。

学と人の問いなおし

1960年代の後半にいたって、日本の高等教育のあり方を根本的に問いただす学生運動が全国規模でおこってきた。大谷大学では、“何のための学問か”という大学としての研究教育体制を問いただす運動と共に、“何のための宗教か”という大谷大学の存在理由そのものを問いただす運動が起こった。このような学生運動をとおして、大谷大学は、自らの現状を基本的に検討しなおす作業を始め、長期間にわたる検討作業の中から「学園総合整備計画」を打ちたてて改革に着手

した。すなわち、

1980（昭和55）年、貫練学寮（男子学生寮）の開設（4月）

真宗総合研究所の開設（6月）。

1982（昭和57）年、旧本館の改修・竣工（8月、「尋源館」と命名）

新本館・研究棟の新築竣工（10月、「博綜館」と命名）

この新研究棟の建設は、従来講座制を廃していたにもかかわらず、依然として講座制にもとづき形態のままであった8研究室体制を改め、6学科制度にもとづきつつ6学科が有機的な連関をもつよう、4群の研究室に6層の書庫が付属する研究室体制に改革する作業であった。

1984（昭和59）年、知真学寮（男子学生寮）の開設

1986（昭和61）年、柔道場および部室棟の竣工（4月）、新講堂棟の竣工（10月）

このような「学園総合整備計画」が完遂されようとしていた直前、すなわち1986年1月に、大学内で「差別ビラ事件」が発生した。大学は折しも学長選挙の最中であった。大谷大学は、部落解放同盟京都府連合会から糾弾をうけ、親鸞の名のもとにある大学の教育、特に人間の解放をめざす教育について、厳しく問いただされた。この糾弾をとおして、大谷大学とその構成員は、これまで如何に自らの閉鎖的な土壌に無自覚で、どれほど自らの差別的な体質に無知であったかに気づかされた。この気づきに基づいて、大谷大学は、大学構成員の総意として『大谷大学差別ビラ事件中間総括』をまとめ（1988年6月）、これを部落解放同盟京都府連合会に提出するとともに、翌1989（平成1）年11月、『大谷大学として部落問題の教育・研究を進めるための「基本方針」』を策定して、自らの閉鎖性を打破し人間解放の教育を実現すべく歩みはじめた。

国際化と個性化にむけて

国際社会の緊密化と価値観の多様化にともない、大学における研究と教育にもこの情勢に適応した制度と内容がもとめられるようになってきた。大谷大学もこうした学内外の要請を受け入れて、一面では、社会に対して大学を開放する諸種の方策をとるとともに、他面では、学生の多様なニーズに応えつつ各々の真の人格形成に資する研究教育体制を構築すべくつとめてきている。これまでに為されてきた大谷大学のこの種の努力の一端を記せば以下の如くである。

1990（平成2）年、市民のための「開放セミナー」の開設。

1991（平成3）年、臨時定員増に対応するために入学制度の改革、入学方法の多様化を実施。

1992（平成4）年、大学設置基準の見直し（大綱化）に応じて一般教育科目を廃止し、専門的教育の一貫カリキュラムに改訂。

短期大学部の国文科を改組して、文芸文化コース・文化史コース・国際文化コースの3コースをそなえた文化学科を開設。

大学院に「特別セミナー」を開設、世界第一線級の学者を招聘して研究の国際交流を推進。

1993（平成5）年、文学部に国際文化学科を開設。

1994（平成6）年、京都・大学センターの単位互換制度を導入してカリキュラムの多様化をはかると同時に、他大学に対して大谷大学を開放。

以上に見られる如く大谷大学の歩みは、その〈新制大学として〉の歩みのみを振り返ってみても、決して平坦なものでなかったことが知れる。それは、一面、大谷大学が明確な建学の理念をもつ故に、自らがまねいた困難な歩みであったかも知れない。しかし、大谷大学は、今後の道も

平坦でないにせよ、「開校の辞」によって宣揚され、「大谷大学樹立の精神」によって具体的な確立をみた建学の理念に導かれつつ、またその理念に新しい生命を不断にそそぎ込みつつ、自らの歩みを進めるであろう。

2. 歴史の検証

大谷大学は、既に第一章において確認したように他の大学とは異なる「建学の精神」を保持している。それは初代学長清沢満之が、東京巢鴨における真宗大学の開校式に述べた「開校の辞」に明確に示されている。また本学が京都の現在地に移ってのちに、第三代の佐々木月樵学長が、本学の入学宣誓式において訓辞した「本学樹立の精神」に具体的な形で詳しく述べられている。それは一言でいうならば、真宗仏教の精神である。真宗仏教とは、いうまでもなく親鸞によって世界人類に公開された大乘の仏教のことである。この真宗仏教の精神が大学の研究・教育はもちろんのこと、大学の運営の様々な場面に至るまで貫徹していなければならない。もし、この真宗仏教の精神が生きていないとすれば、本学の存立の意義は失われることになる。

それ故、本学の教育・研究はもとより、施設の建築・設備の拡充などの際にも必ず建学の精神に照らして厳しく検証されていることは、以下の広瀬学長の言葉によって明らかになるであろう。

〈伝統と創造〉

伝統

その濫觴を尋ねるならば、寛文5年の学寮創立の時にまで遡る。大谷大学は、三百十余年の歴史に支えられた、我が国でも数少ない大学の一つである。

大谷大学の紹介は、こうした言葉のもとに始められる場合が多い。そして、これは正しい大谷大学の紹介であるに違いない。しかし、歴史といい伝統と呼ばれるものは、いったい何なのであろうか。そのことの本質的意味が領かれぬ限り、それは果たしてどれ程の意味があるのか。恐らく不明であらう。単なる時間的古さだけならば、それ自体には誇るべき必然性はなく、ときによると、その古さへの思入れが、今日的活力を枯渇させることすら無いとは言えないであらう。真に誇るに値する歴史、自他を納得せしめる伝統とは、決して古き過去への身勝手な夢想ではなく、その夢想を払って凝視する現在のただ中に実感される、確かな生成の事実であらう。古き自らの殻を破って新しい自己と成り続ける生成の事実の逞しい活力、そこにこそ、伝統のいのちを見定めることができる。それは、変質化する流転の様態ではなく、自己が自己であることの、自己が自己と成ることの、確かな持続態なのである。

確認

ところで、大谷大学三百十余年の伝統には、こうした生成の事実を、はっきり見究めることができる。何故ならば、学場としてのその歩みは、真宗仏教の精神によって貫通されているからである。ここで言う真宗仏教とは、親鸞によって万人のうえに公開された大乘の仏教である。それは、つねに現在することを以て、それ自らの運命とする、人間成就の大道である、と言い切ることができよう。それ故に、人間が生きてある限り、真宗仏教の衰退はない。若しあるならば、それは本来、真宗仏教ではなかったのである。従って、真宗仏教を学場の根本精神として三百十余年を歩み続けてきたということは、つねに今を生きる人間の為の学場として、自らの存立意味を問い続けて来たということである。このことは、大谷大学の精神が大谷大学

それ自体に厳しく要求する自己規定である。それ故に、この自己規定のもとに、正直な確かめがなされているとき、大谷大学は独自の存在意義を発揮する。こうした本学における自己確認の事実を、近くは明治34年10月13日、近代の大学としての出発に当たっての、清沢満之学長の「開学の辞」に見ることができるし、更には大正11年、文部省の大学令による大谷大学を位置づけるべく語った、佐々木月樵学長の「大谷大学樹立の精神」という確信的発言のうえに、それを窺い知ることができる。いま、それを一言にして言えば、学問の公開性と教育の普遍性とを問い正す、人間の為の学場の確立ということである。

再生

さて、このたび本学は、全学を挙げて熟慮し、現代に大谷大学として存立すべき大学像を確立しようとした。それが、学園総合整備計画である。従ってそれは、単なる新しい施設、設備の改善を第一義とするものではなく、大谷大学の現代社会に対する自己表現であり、建学の精神の今日的具象化なのである。こうした精神に立脚する計画に基づく第一期の営為が、昨年5月13日に起工式を行い、来る10月13日に竣工式を挙げる運びとなった、本部・研究室棟の新築であり、それに伴い、本学が大正2年、現在の地において再出発をした時の学舎の、抜本的な改築を中心とする諸工事である。

考えてみると、大学が独立した本部棟を持たないということは、自らの心臓を大切にしないで、独善的観念のなかを浮遊していることの証左であり、苛酷な現代の大学状況のもとでは、余りにも脆弱に過ぎる。今回の本部棟の独立は、こうした本学の軟弱さを根本的に立て直すためである。また研究室棟の充実も、言うまでもなく、本学における学問研究の資質の向上を望むからである。その為に従来の研究室棟をも含めて、講師以上の専任教員には独立した研究の場を提供することとした。しかし私は、改めて思う。確かに研究は最終的には一人^{いちじん}における責任の事柄である。しかし、今日、厳しく問われていることは、その責任性が私有化の方向へ変質していくことであり、それが期せずして学問研究の非人間化を惹起する傾向にあることである。また、今日の大学に対するいま一つの批判は、大学における教育不在ということである。本学が自らの建学の精神に忠実であろうとするならば、この二つの問い掛けを虚心に聞き、自己を点検することを通して、それを超克する具体的方途をはっきりと見開かねばならない。このたび、新しく発足する研究室体制は、まさに、この二点を克服して、内に豊かな研究と、血の通った教育との有機的関係を確立するためのものであり、この新研究室体制が十分な機能を発揮するならば、本学は、21世紀を志向する人間の為の大学となることを確信している。また大正初年より今日まで70年間、大谷大学を名実ともに象徴してきた赤練瓦の本館は、古き外観をそのままに止めて内部を一新し、本学のなかで新しい位置を確保することとなった。

かくて旧本館は、覚如の『報恩講私記』に見られる「酌流尋本源」の語に依ったであろう「尋源」の二字を以て「尋源館」と命名した。また新しい本部・研究棟は、『大無量寿経』に示されている、大乘菩薩の学問のすがたを語る「博綜道術」の語に依って「博綜館」と名づけ、更に従来の研究室棟を、親鸞が『教行信証』において明らかにした学びの精神である「聞思莫遲慮」の語によって、「聞思館」と名づけることとした。「尋源」「博綜」「聞思」、この三つの名称は、やがて第二期工事として、その建築が予定されている「貫練講堂」の名と共に、大谷大学の本質を余すところなく表現しているものと言うべきであろう。

かくて大谷大学は、今、確実に新たな一歩を踏み出そうとしているのである。

第21代学長 廣 瀬 泉 (『大谷大学広報』57-臨時号、1982年)

3. 新学科開設の意義

大谷大学は、本学伝統の精神を堅持しながらも、大学としての社会的使命を果たすために時代や社会の変化に適切に即応した改革を行わなければならない。大学改革のうち主要なものは、学科の開設、カリキュラムの改変などであるが、その際に指針とすべきものが第三代学長佐々木月樵の「本学樹立の精神」である。大学改革を推進する上で、学長として建学の精神を再確認し、学内外に示したのが「本学樹立の精神」であった。

そこで本学が新たに学科の開設や改編を行う際には、佐々木学長の「本学樹立の精神」に照らして推進しなくてはならない。すなわち、大谷大学が学科の開設などを行う場合には、この「本学樹立の精神」が明確に示す、真宗仏教を世界に開放するという願いの下になされねばならない。

以下に示されているように、文学部の国際文化学科、短期大学部の文化学科の開設は、本学の研究・教育の基底をなす仏教の人間学を基軸となすものである。そこに本学が新学科を開設する意義がある。

(1) 文学部 国際文化学科

〈国際文化学科の開設にあたって〉

社会情勢に対応する大学として

大谷大学は、今春より文学部における7番目の学科として、国際文化学科を開設することになった。

現代社会は、国際化・情報化社会へと急激に変容しており、今や私たちは、政治・経済などあらゆる分野において、否応なく国際的なつながりの中で生活せざるをえなくなっている。

一方、高等教育機関としての大学の責務は、自国の文化を正しく継承しつつ、学術文化の中心を担い、常に新しい問題に関する解決の途を探り、必要な人材を育成することにあると言える。

国際文化学科はまさにこのような状況に対応するものとして開設するものである。

国際文化学科開設の意味

現代世界は、国際的な枠組みの中で、さまざまな摩擦や紛争を生じ、その解決の方途が模索されている。これらを解決しうるものは、いまや政治や経済ではなく、また、単に知識として外国を理解することでも無く、それぞれの発想や行動の基底にある文化の相互理解を深めることではないかと考えられるのである。

大谷大学は従来文学部において、真宗学・仏教学を始め、文学・歴史・社会・哲学・宗教の各分野において教育研究を重ねてきたが、その根底をなしてきたものは、仏教的人格の陶冶を願いとする建学の理念にもとづいた、『人間』を問うことでもあった。そしてそれはおのずと日本のみならず、世界から学ぶ営みでもあったのである。

今、この各学科にあった世界への研究視点、学問的蓄積の融合をめざし、現代社会の要請に応えようとするものが、国際文化学科である。

大谷大学の使命は、物質的な繁栄を追求するあまり、人間疎外に陥りがちな現代社会にあって、個々の精神を十全に機能させ、真の人間的交流を行いうる、健全な人格の育成を目標とすることに他ならない。

国際文化学科は、大谷大学の教学の基底をなす人間学を基軸とし、自国文化と異文化への認

識を持ち、相互理解を深めながら、人間的な交流をなしうる国際人を育成して、現代社会に貢献する大学としての責務を果たそうとするものである。

国際文化学科の概要

国際文化学科は、前述の通り文学部既設6学科の研究範囲から、国際性の観点に立つ融合を図るものであり、既設各学科より定員を30名ずつ割譲して、入学定員を180名として発足する。

カリキュラムは比較文化研究・異文化交流研究・地域文化研究を縦軸とし、コミュニケーション能力の涵養を目指す語学科目を横軸に、また、情報科学・環境科学などをはじめ豊富な自由科目群によって、各自の関心に応じた研究ができるように配慮されている。また、本学の教育理念に立って、東洋的仏教文化を重視しつつ、広く世界諸国の文化に学ぶこととしている点も特色として挙げるべきであろう。

なお、研究室は1号館の増築部分1・2階に第5研究室として開設される。

明日の大谷大学へ

国際文化学科の開設は、文学部既設各学科全分野に、『国際性』の観点から横断的脈絡をもたらし、有機的に作用し、活性化することが期待される。

また、昨春設置された短期大学部文化学科や、大学院の仏教文化専攻、あるいは真宗総合研究所などとの学問的関連性も少なくないことから、大谷大学全体の教育研究にとって、国際文化学科の設置を契機として、より一層の学術振興が期待されるところである。

いま、国際文化学科の開設にあたり、重ねて建学の精神に立ち返りつつ、大谷大学の新しい世紀を迎えたいと願うものである。

文学部長 古田和弘（『大谷大学広報』93-春号、1993年）

(2) 短期大学部 文化学科

〈文化学科を開設して〉

文化学科新設の意味

文化学科は、前身の国文科を改組、拡充して発展的に再編し、本年度より新設となったものである。そして従来の国文科の枠組をこえて、広く人類が生み出した文化について、文芸文化・文化史・国際文化の3つの視座からのアプローチをおこない、文化に触れ、親しみ、考察を加え、さまざまな文化の中の人間の営みを知り、現代の社会と文化と人間に対する感性を培い、これからの社会に求められる教養人の育成を目的としている。現代社会は、人間へのあたたかなまなざしを求めているが、この学科では特に仏教精神にもとづく総合的な人間学を機軸に、文化への多角的なアプローチによって、人間そのものを問い、真の人間性の回復をめざしている。

文化学科を構成する3コース

○文芸文化コース

人類の高度な文化的所産である文芸作品へのアプローチをおこない、文芸作品を生み出した文化的背景と人間存在に対する考察を加え、社会と文明と人間のかかわりとを見つめる眼を養っていくコースである。従来の国文科に相当する科目群、とりわけ日本文学と日本文化にかかわる多彩な科目を開講し、それに表現についての基礎理論、作品演習を中心に、文学と人間と文化についての感性を培い、美しく正しい言語表現を修得した教養人の育成をめざすものである。

○文化史コース

人類が長い歴史の中で生み出してきた文化に歴史的なアプローチをおこない、人類の歴史的遺産を見る眼と、それを大切に思うところを養っていくコースである。われわれの生活文化、日本・東洋・西洋の歴史と文化にかかわる幅広い科目群を開設し、加えて史料演習を中心とした学習を通して、いま美術館・博物館・資料館などで求められている人材、すなわち文化と人間とのかかわりを歴史的な視点から見ることのできる教養人の育成をめざすものである。

○国際文化コース

世界のさまざまな地域の言語と文化と人間へのアプローチをおこない、異文化への理解を深めるなかで、日本文化への視点を養っていくコースである。ヨーロッパ、アメリカのみならず、アジア、特に仏教文化を背景にもつ地域での言語と文化と人間のかかわりを考察するための科目群を多く開設し、さらにそれらの科目群と文化演習によって、世界の文化圏への理解を深め、これからの国際社会であらゆる人々と手をたずさえ、社会をつくっていくことのできる心豊かな国際人の育成をめざすものである。

短大における文化学科の位置

短期大学部の仏教科・文化学科・幼児教育科の入学定員は、それぞれ80名、300名、70名(臨時定員増分を含む)となった。従来の仏教科180名、国文科200名であったものを、文化学科として国文科の200名に、仏教科より100名を移行した結果である。これは仏教科を設立時の原点に立ち戻らせ、永年仏教科が併せもっていた仏教文化的学問フィールドを文化学科に移行させ、仏教・幼児教育の両科がそれぞれ2年間で専門的職業機関、文化学科を幅広い視野と教養を養うリベラル・アーツの学科としての性格を明確にしていきたいとする表明なのである。

短期大学部長 若 槻 俊 秀 (『大谷大学広報』4-1号、1992年)

4. 人間学の総合大学として

大谷大学は、1901年(明治34年)に、それまでの真宗大谷派(東本願寺)の僧侶(寺院子弟)の養成機関であった京都の高倉学寮を廃止し、西欧における大学制度を参考にしながら、東京の巣鴨に文学部だけの単科大学である「真宗大学」として再出発をした。それ以来、大谷大学は文学部だけの単科大学という在り方を今日まで堅持している。このように、新しい時代の到来に伴い「真宗大学」と名乗って再出発したということについては、そこに二つの意味が意図されている。

第一には、親鸞によって開顕された真宗仏教が僧侶のみの独占物とされていたそれまでの在り方を解消し、真宗仏教を学として社会に開放することを意図したことである。

第二には、真宗大学として再出発したときの初代学長清沢満之の「開校の辞」において、「本学は他の学校とは異なりまして宗教学校なること、殊に仏教の中に於いて浄土真宗の学場であります。即ち、我々が信奉する本願他力の宗義に基づきまして、我々に於いて最大事件なる自己の信念の確立の上に、其の信仰を他に伝える、即ち自信教人信の誠を尽くすべき人物を養成するのが、本学の特質であります。」と宣言されているその中で、「本学は他の学校とは異なりまして」と述べられているように、当時の他の学校とは異なった大学であることを意図し、それを具体的に表現するために、文学部だけの単科大学として開校されたことである。

特に第二の意図については、当時の日本は、文明開化の最中であり、西欧から政治学、法学、医学、経済学、化学などに代表される近代の合理主義に基づく諸科学を学び取ることに明け暮れ

ていた。そして、それらの専門分野の人材を育成するために、国家は東京帝国大学、京都帝国大学を設置したが、その他もろもろの学校も開校され、その必要に応じようとしていた。そのような科学的合理主義による近代化に邁進している当時の状況の中であって、清沢満之は、それがいずれ必ずや人間の尊厳性を阻害し、真の意味で人間の幸福をもたらすものでないことを見極め、現に生きている人間を全体的にトータルに学ぶことこそ、最も大切であると確信し、「本学は他の学校とは異なりまして」と言い切ったのである。その具体的な表現が文学部のみの単科大学なのである。

そのような人間尊重の原点は、現在の大谷大学において明確に伝統され、「人間学」としてそれが、全学生に必修として課せられる共通科目において、特に「総合科目」として必修とされているのである。「人間学」には、「人間学Ⅰ」と「人間学Ⅱ」とがあり、「人間学Ⅰ」は、「仏教と現代」というテーマの下で、釈尊の仏教を、それを浄土真宗として開顕した親鸞という、ひとりの真摯な仏教者の思想の展開、その教えの基本となっている釈尊の教えをふまえつつ、広く時代の状況との関係の中で総合的に尋ねてゆく。この講義は、求道的人間の典型を親鸞に見、人間にとっての真実を探求して止まなかった親鸞を学ぶことを通して、我々がそれである人間そのものを、根源的に問おうとするものである。同時に、透徹した知恵の眼をもって人間と人生を凝視し、人間の現実生活がはらむ虚妄性を鋭くえぐり出し、それから人間を開放しようとする釈尊の仏教の思索の独自性を、釈尊の伝記やその基本的思想に対する理解を深めながら学ぼうとするものであり、主に真宗学科と仏教学科に所属する教員によって担当されている。また、「人間学Ⅱ」は、広く人間に関わる諸問題についての提言を求め、それぞれの専門分野の学問研究に基づいた思索や学びによる、それについての講義であり、本学の全ての教員の中から担当者が選任されている。

このように、本学が文学部のみの単科大学という伝統を堅持しているのは、本学の設立理念を大切にし、あくまでも人間学の総合大学であり続けたいという、人間尊重の仏教精神によるのである。単科大学とは言え、真宗学科、仏教学科、哲学科、社会学科、史学科、文学科と、それにこれら6学科を基盤とした本学独自の国際文化学科を加え、7学科を文学部として擁している。しかし、いずれの学科においても、それぞれの専門に基づきながら、常に人間をトータルに問題とし、生きた人間そのものを探究するのであり、その意味で本学は人間学の総合大学なのである。

第3節 建学の理念の確認と具体化

1. 印刷物の配布

本学の建学の理念は、先に述べるように、初代学長清沢満之の「真宗大学開校の辞」、第3代学長佐々木月樵の「大谷大学樹立の精神」に明確に語られている。しかし、この建学の理念は、常に継承され、確認されつつ、日常の大学運営の中に活かされるものでなければならない。

本学においては、これらを常に継承していく努力として、毎年の印刷物に掲載し、その意味を全学で考えることができるように配慮してきた。即ち学内的には毎年、新入生・教職員に配布する『学生便覧』と、毎年、全学生・教職員に配布する『学生手帳』における収録がこれである。また、対外的な公式の大学紹介パンフレットとして位置づけている『大学要覧』にもこれを収録して、広く学の内外にこれを公表し、常なる確認の機会としてきた。

本学において、学科の改組、カリキュラムの改革など、重要な事案を検討する時には、多くこの建学の理念に立ち返って検討することが行われてきた。また、学長の諮問機関として設置されている学園整備総合企画委員会の答申にも、重要な事項の検討経過においては建学の理念に照らした検討が重ねられたことが述べられており、この意味においては、学内における建学の理念の確認は常に行われていると言ってもよいであろう。

2. 施設への配慮

本学は、東本願寺の学寮に出発し、講場には常に御内仏をしつらえてきた伝統を現在でもそのままに継承し、講堂には「帰命尽十方無碍光如来」の十字名号を本尊として安置している。しかし、このことは単に歴史を踏襲した結果では無く、近代的な再検討を経て実現してきたことである。

第3代学長佐々木月樵は、学長就任前の大正10年8月より大正11年6月まで、欧米諸国の教育事情を視察し、宗教精神に立脚する大学の備えるべき施設は、礼拝堂と教場と学寮の三つであると指摘し、その実現に努力をはらったのである。特に学寮においてその理念の実現をはかろうとしたが、学長の任期中ばに急逝された事情もあり十全の形で現在も運営されているとは言えない面もあるが、人間教育・全人教育を標榜する理念は今も引き継いでいると言ってよいであろう。

このように、大学教育における礼拝施設の意味を明確に自覚した本学は、本尊を安置する講堂を常にキャンパスの中心に位置させ、仏教精神を基盤とした自己の信念の確立を求める建学の理念を象徴せしめてきたのである。昭和61年、現講堂を新築する際も、礼拝堂としての性格付けを明確にした上で、その学内の位置および機能に配慮して設計をしてきたのである。

旧講堂内には、左右側壁に建学の理念を語り続けてきた歴代学長の肖像額をかかげ、常にその思念に思い及ぶことができるよう配慮してきた。現講堂を新築するに際しては正面に初代学長清沢満之、第2代学長南条文雄、第3代学長佐々木月樵の、近代大谷大学の基礎を築いた三代の学長の肖像をかかげ、入学式をはじめ、さまざまな式典においてその風貌に接してその理念を再確認する契機としている。

更に、近代化された大谷大学の建学の理念を伝える建築物・施設については、学内整備計画の中にあっても出来る限り保存する配慮をしてきた。現講堂を新築するに際し、舞台上の扉は旧講堂のものをそのまま使用し、象徴的建築物であった旧本館（現尋源館）は、鍵型の左右両翼を一

部撤去した他は外壁をそのままに残し、木造の階段手すりや銅板天井板をもとのまま使用するなど、内部も往昔の雰囲気を再現する配慮をした。

大谷大学にとって近代化の象徴とも言うべき意味を持つ旧本館は、内部改装後一階は教室として使用したが、2階には同窓会事務局や会議室・貴賓室などを配置してメモリアルホールとしての性格づけを明確にしたほか、小講堂としての尋源講堂を設けた。

また、創建当時の大学本館の姿を陶板画として会議室正面にかかげ、形姿の保存と同時に理念の継承をはかるための配慮としている。

昭和54年より開始された学園整備計画による本部講堂棟の完成に合わせて、学内の建物の名称も新たに付与し、一部変更して整備した。その名称と出典は以下の通りである。

博綜館 はくそうかん ー本部・研究室棟ー

大無量寿経・証信序にみられる「博綜道術」（博く道術を綜う）の聖語により、本部・研究室棟の名称とした。

尋源館 じんげんかん ー旧本館ー

「尋源」の語は中国の古典にも多く見られるが、近くは覚如の報恩講式に「酌流尋本源」（流れを酌んで本源を尋ぬる）とあり、その文に依っている。本学が大正2年、現在の地に新学舎を建立した時以来のゆかりある名であり、当時の建物である本館の名とした。

聞思館 もんしかん ー研究室棟ー

教行信証・総序に見られる「聞思莫遲慮」（聞思して遅慮すること莫れ）の言葉にもとづき、研究室の名称とした。

3. 宗教行事への配慮

本学における宗教行事としては、6月1日の宗祖親鸞聖人のご誕生会、11月27日の大学報恩講、10月13日の開学記念式典があげられ、これらの日は全学休講としている。これらの日は所定の法要形式に則って行われ、大学報恩講には引き続き歴代講師謝徳法要も厳修される。また、これら法要・式典に続いて記念講演を拝聴することを例としている。11月28日は本山報恩講ご満座参拝のため全学休日としている。

このほか、毎月28日の宗祖聖人のご命日には法要と記念講話を行う。この日には2限目を休講とし、全学が参加しうる態勢をとっている。また、毎日始業前には、尋源講堂において大学の部館長が調声を勤めて朝の勤行を行っている。

また、入学式・卒業式も仏前において行われるほか、さらに新入生には、入学式と同時に本山に参拝の機会を持つように配慮している。

これらの行事は、「本学は他の大学とは異なりまして」と明確に規定された、本学建学の基盤の常なる確認を我々に問うていると言うべきであろう。さらにまた、人間としてあることへの自覚を促す機会であり、「自信教人信」と顕わされ、「自己の信念の確立」と述べられた建学の理念が、全学に問われる時でもあると言えよう。同時に、そのような機会を与えてくれた仏縁への感謝・報恩の行事であると位置づけることができるであろう。

そのような機会に行われる講演は、我々に語りかけ、示唆を与えてくれるものとなる。その意味において、このような機会は大学人が独占すべきものではなく、広く社会に開放すべきこともまた大学の建学の理念であり、すべて社会に向けて一般公開された行事として行われている。こ

これらの公開講座には地域社会をはじめ、広く各層よりの聴講者がみられるが、なかでも、夏期、本学を会場として行われる本山の安居に合わせて開講する暁天講座は広く地域住民に親しまれるものとなっている。

これらの行事における講演の概要は次の通りである。

開学記念式典記念講演

敬称略(以下同じ)

年度	講 師	講 題
1991	東京大学名誉教授 駒沢大学教授 脇本 平也	清沢満之を想う
1992	東京大学文学部助教授 島藺 進	現代社会と宗教教団
1993	京都大学教授 野田 宣雄	教養と宗教—独・英・日の比較—
1994	東洋大学教授 高木 宏夫	現代社会における仏教の意味
1995	横浜国立大学名誉教授 久木 幸男	三層の光彩—真宗大学開校の意義—

報恩講講話

年度	講 師	講 題
1991	大谷大学名誉教授 堅田 修	親鸞聖人の行化を偲ぶ
1992	大谷大学名誉教授 坂本 弘	鈴木大拙における阿彌陀佛
1993	大谷大学名誉教授 佐々木教悟	親鸞聖人の生死観
1994	大谷大学名誉教授 廣瀬 杲	宗祖親鸞聖人を尋ねて
1995	大谷大学名誉教授 山本 唯一	芭蕉と俗縁

宗祖誕生会記念講演

年度	講 師	講 題
1991	成城大学教授 森岡 清美	「深いいのちの思い」—若い学徒兵の遺書から—
1992	作家 高 史明	黒闇のどん底から光を仰ぐ
1993	中央大学教授 丸山圭三郎	生と死をめぐる—ソシュールと東洋思想—
1994	同朋大学学長 池田 勇諦	観経に学ぶ
1995	京都市立芸術大学学長 上山 春平	親鸞と西田幾多郎

御命日勤行講話

年月日	講 師	講 題
1991. 4. 27	教授 大河内了義	現代世界における仏教徒の使命
1991. 5. 28	教授 小川 一乗	「有身見」私考—輪廻の形式—
1991. 6. 28	教授 小野 蓮明	「愚禿釋親鸞」の名のりに憶う
1991. 10. 28	教授 鍵主 良敬	「華嚴よりみた大乘の至極」
1992. 4. 28	教授 加来 一丸	「ことばの華と沈黙の美学」—フランス式と日本風—
1992. 5. 28	教授 片岡 了	「ことばと文化」
1992. 6. 27	教授 片野 道雄	「インド唯識の一乗思想」
1992. 10. 28	教授 加藤 尚子	「レトロウィルスと人間」
1993. 4. 28	教授 河内 昭円	三教指帰注集の出現
1993. 5. 28	教授 神戸 和磨	死生観—清沢満之と正岡子規—

1993. 6. 28	教授 日下部有信	「ヒト・クジラ・マグロ」
1993. 10. 28	教授 訓覇 曄雄	「信教の自由について」
1994. 4. 28	教授 喜多川恒男	外村繁に見る「親鸞像」
1994. 5. 28	教授 酒井 汀	精神分析の人間観—エリクソンの「自我漸成図式」から—
1994. 6. 28	教授 滋賀 高義	「味」について—マレーシアの旅—
1994. 9. 28	教授 佐々木令信	『中右記』にみる成尋像
1994. 10. 28	教授 島田 正彦	越前の中世「北陸道」—親鸞聖人・蓮如上人の聖跡を手がかりに—
1995. 4. 28	教授 新村祐一郎	ギリシア人と歴史学
1995. 5. 27	教授 鈴木 繁一	英語教師の脇机
1995. 6. 28	教授 鈴木 幹雄	信仰と論理—世俗の立場で—
1995. 9. 28	教授 瀬戸 進	オモイヤリ ヒドリアン 恕と私と左 脚
1995. 10. 28	教授 多田 稔	アイデンティティーの確立—ウィリアム・モリスの場合—

暁天講座

年月日	講 師	講 題
1991. 7. 22	教授 武田 武麿	現代を見つめる宗教
1991. 7. 23	教授 小野 蓮明	無碍の一道
1991. 7. 24	名誉教授 佐々木教悟	心の垢を洗う
1992. 7. 22	教授 若槻 俊秀	「五十而知天命」について思うこと
1992. 7. 23	教授 鍵主 良敬	「無生を生きる」
1992. 7. 24	教授 幡谷 明	「念仏の伝統」—法然から親鸞へ—
1993. 7. 26	教授 堀尾 孟	「心の所在」
1993. 7. 27	助教授 木村 宣彰	「進むを好み退くを悪む」
1993. 7. 28	学長 寺川 俊昭	「回向する大悲」
1994. 7. 25	教授 石橋 義秀	「平安仏教から鎌倉仏教へ」—「今昔物語」の往生説話—
1994. 7. 26	教授 名畑 崇	「中世の自立・近世の安穩」
1994. 7. 27	教授 小川 一乗	「空法を修せば放免ならず」
1995. 7. 24	助教授 宮下 晴輝	「仏教の問題領域」—信仰と知識—
1995. 7. 25	教授 神戸 和麿	「蓮如上人の教化」—仏法領と王法—
1995. 7. 26	名誉教授 廣瀬 杲	「本願毀滅のともがら」

4. 真宗総合研究所

大谷大学の理念は、個人にあっては自己の信念の確立であり、組織としては仏教の開放であると言ってもよいであろう。そして大学の社会的使命は文化の継承であり、創造であると言うべきであろう。それらの意味において本学で行われるすべての研究活動は個々に独立したものであるべきでは無く、一つの方向を向き統合化・総合化されるものでなければならないのである。

その点においては、下記のような理念のもと開設された「真宗総合研究所」も、本学建学の理念の一つの結晶と称すべきものであると言えよう。

〈研究所開所式挨拶〉

大谷大学におきまして、かねてからの懸案となっておりました大学付置の研究所が、その機を得まして大谷大学真宗総合研究所という名称をもって、今日より発足することとなりました。既に大学内及び理事会における所定の手続きを終り、正式に文部省への届け出も完了致したことであります。本日、こうして研究所の開所式を迎えるに当りまして、ご挨拶にかね所感の一端を述べさせていただきます。

大学付置の研究所につきましては、学長就任のとき以来、私の願いのひとつとしてきたことでもあり、そのことにつきましては折に触れ申し参りましたが、この一カ年の間に日本の大学がそれぞれに設置しております研究所の規模、組織、内容等につきましても、ときには資料を通して、ときには直接にその研究所へ足を運ぶというようにして、多くの大学付置研究所の実情を調査してもらいまして、その報告に基づき、本学の精神と現状にふさわしい研究所の在り方を求めて参ったことであります。もちろん、それでもって研究所の在り方が十全なものとして明白になっているとは申しませんが、少くともそうした諸大学に付置されている研究所の長所短所についての検討は致しましたので、基本的には余り過ちを犯すことの少ない方向性によって発足することができたと考えております。

現在では日本の殆どの大学が何等かのかたちで付置の研究所をもっておりますが、その内容のよしあしということは別と致しまして、大学が付置研究所を持つということは、それぞれの大学における特色の主張を、研究所のうえに表現しようとしているのであると申すことができると思います。そうしたなかであって大谷大学は、伝統ある大学であるにもかかわらず、付置の研究所を持つことなく今日に至っているのであります。この事実は私の個人的な感情から申しましても、きわめて不思議なことと言わざるを得ませんし、この不思議な大学の実情については、なにか必然的な理由があるのではなからうか、と考えざるを得ません。しかし、本学の今日までの歩みのなかで、研究所の必要性をまったく感じなかったというわけではありません。いわゆる旧制の大学でありましたときにも、その時代社会の状況のもとで研究所を設置したことはありました。しかし、その多くの場合、余り積極的な必要性をもたなかったのでありましようか、殆どの場合、時代の推移のなかで終っていきまして、その復活への要望も出なかったように思われます。私は、むしろこうした事実の底辺に、大谷大学の存立の基盤にかかわる課題を見ることができないのではないかと思うのでありますが、その課題を積極的なかたちで問い、その問いのもとに新しい研究所を志向するようになったのは、昭和24年の新制度による大学としての再出発以来、新しい学科制度等の整備が行われ、それがひとつの安定したすがたをとるようになってからであると思います。例えば、昭和42年から45年の頃までの3年間、試行というかたちで学の内外の別を超えて持たれた大谷大学宗教教化学研究会なども、本学における研究所志向のひとつの努力であったと思います。また昭和47年に安藤俊雄学長の提案によって結成された大谷大学真宗学総合研究班は、更に明確な方向の見定めのもとに発足したものであったと思います。その研究班によって行われた研究の成果は、三冊の研究紀要として発表されており、その全体像は、やがて付置研究所へと発展するべく方向付けられていると申してよいと思います。その後、松原祐善学長のもとに、「近代における真宗の展開」というテーマを設定して出発した大谷大学真宗総合研究班の今日にまで至っている歩みは、具体的に大学付置の研究所の設立を促す性格のものであったと考えることは、大方の人びとにより領かれる事柄であると言いつけることができるのでありましよう。

ところで、このように大谷大学の歩みをふり返ってみますとき、こと大学付置研究所の設立に関しては、ほとんど他の大学においては見ることでできない「産みの苦悩」があることに気付かさせられます。それは、建学の精神をつねに現在の事として確かめつつ歩くということを手自らに課した大谷大学における学事の、自己責任性に基因するものであると私は考えます。すなわちそのことが、安易なかたちで付置研究所の設置を許さないのでありましょう。そのことはまた、大谷大学の学事にとって必然性をもつ研究所を志向して模索することでもあります。したがって、本学がこれまで付置研究所を持たなかったということは、決して本学の消極性の現われではなく積極性の現われである、と言い切ることができるのであります。

実は、このようなことを可成り実感を伴ったこととして領かしめるものが、終戦後30年の本学の歩みであると思います。ご承知のように大谷大学も昭和24年、他の諸大学とほとんど同じく、新制度による大学としての再出発を致しました。したがって、他の諸大学と同じ意味における変様をしたことはもちろんであります。本学は他の諸大学とは異った点で変らざるを得なかったということがあります。新制大学を支える共通の理念については、いまことさらに申す必要もないと思いますが、よく「大学の門戸解放」とか、「国家のための大学から国民のための大学へ」といった具合に語られており、おそらくこうした方向で大学は戦後日本における民主主義文化の促進のために役立つべく教育研究の在り方を改めて行かざるを得なかったのでありましょう。それにともなって今日の大衆化現象を惹起するような大学へと変って行ったわけですが、こうした諸大学に共通する変様は、本学の場合、他の大学には余り見られない状況の変化をもたらしました。それは、宗教に依って立つ大学であることの独自の役割を基本的に、そして、具体的に問われると同時に、その新しい表現を求められたということでもあります。勿論、いわゆる宗門立と呼ばれる大学は、決して大谷大学だけではありませんが、他の大学の場合と少々違ひまして、大谷大学は新制の大学として存続するなかにおいて、宗門立の大学であるということの基本的精神を決して失うまいとする方向性を確保し、それを、大学の現実として表現しようとし続けるということでもあります。このことは決して容易なことではなく、その困難さは旧制大学であった時以上に厳しいものであったと思われまゝ。多くの問題を担いつつ、新しい大学としての表現をとるということは、その問題の根源へ具体的に立ち返ってのみなし得ることであるからであります。すなわち新制の大谷大学は、他の諸大学と共同して新しい時代の文化創造に寄与するという共通の役割を担うということと、近代の大学として発足したとき以来の独自の大学論の顕現の場であろうとすることとの、厳しい緊張関係を絶えず保持し続けながら、新しい大学を創造すべく自己脱皮を重ねて来なければならなかったものであり、これが昭和24年以来今日に至るまでの大谷大学の独自の在り方の模索の質であったと考えます。

甚だ唐突な言い方を致すようではありますが、このような大谷大学の課題を、より積極的に明らかにしようとする試みが、付置研究所の設置を求めての試行の底を貫通するものであったと、私は考えるのであります。私は、他の諸大学が何等かの意味で自らの大学の独自性、特色を主張しようとする場として付置研究所を設置するとき、極めて多くの場合、自らの大学の特色とする事柄を文化という言葉と結合さすことによって、何々文化研究所という名称をつけているという事実を思いますとき、大谷大学における研究所設立のための「産みの苦悩」は、文化という言葉を手安易に使い得ないということにあるのではないかということを手考えるのであります。おそらくそのことが、明確な大学論に立脚する大谷大学の独自の性格であると思ふの

であります。

そのことに関して少し申し添えさせて頂きたいと思いますが、それは明治34年10月13日、本学が清沢満之によって真宗大学という名乗りのもとに新たな出発を致しました時に、方向付けられた課題であると言えます。真宗大学という名は清沢満之によって始めて名乗られたものではありませんが、ただ、清沢満之によって改めて真宗大学と名乗られたとき、その名は大谷大学の生命を自覚的に明らかにすることとなったのでありましょう。すなわち、真宗の二字は、まさしく親鸞によって領受し開顕された「大乘のなかの至極」を顕わす言葉でありますから、清沢満之はそこへ帰って真宗の本義を確かめ、それをもって近代の大学の性格と方向とを決定する名称としたのであります。そのことは、清沢満之の「開学の辞」によっても、十分に窺い知ることのできる事柄でありましょう。すなわち真宗とは処世の立脚地を明示する言葉であります。ということは、当時の日本の諸大学が新しい文化の創造を理想として、それぞれに出発をしようとする現状のなかに、人間における処世の方途のみを追究しようとする傾向のあることを、鋭く見取った清沢満之の洞察の確かさが裏打ちされているのであります。そして、処世の方途を求めて突き進む文化的営為の行く手に、やがて必然するであろう人間性の喪失、人間性の物象化を先取し、そのことが、人間の荒涼とした終末の姿を見定めることとなったのであります。それであればこそ、清沢満之が真宗大学の開学という具体的な人間教育の場の確立とともに、彼が当時の文化的営為のただ中で主張したことは精神主義であり、その精神主義のもとでのみ豊かに実る真に尊貴なる人間の自立的共存の境界、すなわち、精神界の活現であったのであります。したがって、清沢満之によるこうした大学の方向づけは、必然的に、文化それ自体を底深く問い続けることによって、真に立脚地に立って生きる創造的人間の文化を築くことをもって根本の使命とするような大学であることを、大谷大学の課題たらしめることとなったのであります。そのことは、やや具体的確かめ事として大胆に申しますならば、天皇制中心の全体主義的方向のなかへ有無を言わず文化的営為の全てを呑み込んでいくような激流への、最も根深い地平からの批判の基礎をつねに保持せしめるものであったと言い得るのではないかと思います。そしてそれはまた、どのような形におきましても人間の尊厳と自立とを疎外する営為の質を見破り、それを批判し続ける強靱にして公開された精神文化の創造に外ならないのでありましょう。

人間における真宗を明らかにすることを究極的課題とし得ないような文化、したがって、そのような文化を促進せしめていく研究、教育が、やがて人間の滅びを必然するということへの確かな予知のもとに、あえて真宗大学と名乗って開学された大学は、やがて現在のこの京都の地に移転をして、文部省令による単科の大学となるという大きな転期を迎えることとなるわけでありましたが、そのとき本学は初めて大谷大学と名乗るわけでありました。大谷大学という名称は、そのみではほとんど無内実と申してもよいほど符号的な名称であります。であればこそ、その内実をどのように決定するかという、大きな課題を荷負する名称でもあるわけでありましょう。実は三代学長佐々木月樵が語り、そして書き残した「大谷大学樹立の精神」こそは、大谷大学という名を課題的名称として受け止め、その内実を初代学監（学長）清沢満之の真宗大学開学の精神のもとに明らかにした大学論であると言えます。すなわち大谷大学は、近代日本文化の構築の時期に当って、鋭くもその文化的営為のなかに人間の滅びの当来を予知し、真に人間成就の方向を指教した清沢満之の建学の精神を以て、大学の研究と教育の在るべき姿を具体的に明示した佐々木月樵学長の大学論によって存在する大学である、と私は言

い切ることができると考えてるのであります。

私は、このような近代文化の根底に見落されていた決定的盲点を指摘し批判する精神のもとに明示された厳正な大学論に依って立つ大学であるというところに、大谷大学が安易に付置研究所を設置することを自らに許し得なかつた根本的な理由がある、と考へます。したがつてまた、明治以来構築されてきた研究と教育の全体が荒々しく問い直されるという、いわゆる昭和20年の終戦を新しい転期として、再び新たな出発をしようとした新制大学の歩みが、今日の文化状況を生み出すはたらきをしているという荒涼たる現実の只中であつて、大谷大学が自らの大学論に立ち返つて、その存立の意味と使命とを想起するとき、同じ根本的な理由の故に、かえつて付置研究所の設置を志向せざるを得なかつたのである、と考へるのであります。つまり現在の、大学に集約される教育と研究とは、新しい学制を定めて出発したときの理念とは裏腹に、荒廃と細分化とのなかに方途を見定め得ないで苦悶していると申しても過言ではないと思ひます。このような大学の現実状況をふまえて、新制度のもとでの大谷大学30年の歩みのなかに研究所設置のための試行のあつたことを思い返しますとき、これもまた大谷大学の精神に基因する必然のことであつたことが知られるのであります。そして今日、大谷大学真宗総合研究所という名称のもとに、大学付置の研究所が発足することとなりましたが、まさに時節到来と申すべきでありましよう。

以上のような確かめのもとに誕生することとなりました研究所は、大谷大学の精神、したがつて、それに基く大学論に照して行つた二つの決断を、その名称のうゑに表現致しております。その第一は、文化と教学という言葉を使用しなかつたということであります。それは、これまで縷々話つて参りましたことでもお解り願へることであらうと思ひますが、文化とは大谷大学が常に厳しく問い直しつつ創造していくべき課題ではあつても、決して自明のこととして、そのなかに大学そのものが包み込まれる質の事柄ではない、という確かめがあるからであります。すなわちこの点が多くの場合の文化を名とする研究所と異なる一点であります。また教学という言葉は佐々木月樵の大学論によつて、始めて純粹にして具体的な性格をもつた言葉として明らかにされたのであります。すなわちそれは、文化の盲点を摘示し、文化の傾向を正す学の名であると思ひます。今日では、教学という言葉が厳密な確かめのないままに、一般に使用されておりますが、私達は、そのような一般的用法と峻別して、まったく新しい学の名であることを改めて明瞭にすべきであると思ひます。まさしく教学こそは、大谷大学の学事の性格を決定するものであり、あえて申しますならば、言葉の最も明確な、そして、最も公明な意味における宗教の学であると申してよいかと思ひます。その意味において、教学という言葉の一般的使用に選ぶということで、その言葉を名称のなかに置かなかつたのであります。以上が、新しく発足する研究所の性格を明瞭にするために、決断したことの第一の点であります。

そして第二点は、真宗と総合という言葉が研究所の名称として使用したということであります。真宗は、大谷大学の学事の全ての依つて立つ根拠であります。と同時に、大谷大学の学事が、それを明らかにすることによつて、真に創造的人間を誕生せしめる生命でもあります。そしてそのことこそ、人間究極の依處であると言ふことでもあります。大谷大学は、真宗に依つて立つ人間を教育することをもつて自己の使命とし、真宗が明らかである人間の営為をこそ文化と呼ぶに値するものであることを確認する大学であります。そのような意味におきまして、真宗を研究所の名称のなかへ積極的に位置付けたのであります。また総合という言葉を使用するところには、大きく確かめるべき事柄が二つあります。その一つは、特殊化し個別化し

て限りなく拡散していく学問研究の底に不知不識のうちに醸成されていく非人間化を問い直し、真に人間における学問であり、人間を成就する研究であるということを明らかにするための具体的な方法として、総合という言葉を使うということでもあります。しかし単にそれだけではありません。むしろ、そのことをも含めて、より大切な確かめがなくてはならないと思います。それは、人間にとりまして総合という事柄は、何によって成立するのかということでもあります。個別なるものをただ集めるということであるならば、それは単なる集合であって、その本質にある個別的閉鎖性を払拭することはできないと思います。そういう意味からすれば、総合ということは、人間には不可能というてもいい程に困難であるということの認識がなくてはならないのでありましょう。しかし、どれほど困難でありましても、総合ということがないならば、人間のための学問、人間を成就する研究は一片の夢に終るということも、また確かなことでもあります。このような意味における総合を人間の事として成立せしめる一点、それが、真宗であります。このような意味におきまして総合という言葉新しい研究所の名称のなかへ取り入れたのであります。このような二つの決断のもとに名付けられることとなりました大谷大学真宗総合研究所の名称は、明らかに大谷大学の精神を表現したものである、と考えるのであります。

とは申しましても、今日発足をした研究所は、ほとんどその内容を持っておりません。また例え二、三のプランがあると致しましても、それが本当に大谷大学真宗総合研究所の名にふさわしいかどうかは未知であります。しかし私は、諸先生方のお力によりまして、必ず名実ともに大谷大学真宗総合研究所と名乗るにふさわしい大学付置の研究所が、一步一步と充足することを信じております。私は、この研究所は10年や20年で結実するものであるとは考えておりません。大谷大学の未来とともに、長く遠い射程距離のもとに着実な創造が行われていくべきものであると考えております。私は、この研究所が全大谷大学の力の結集によりまして、その使命を果す研究所となるのでありましようことを深く信ずるとともに、全学を挙げてのお力尽しを切に念願してやみません。

本日、新しい大学付置の研究所が、大谷大学真宗総合研究所の名のもとに発足するに当たり、日頃、自分自身の心中を去来しております感慨の一端を申し述べさせて頂き、それをもって開所式のご挨拶にかえる次第であります。どうぞよろしく願い申し上げます。

学長 廣 瀬 杲 (『大谷大学広報』56-臨時号、1981年)

〈研究体制充実のために—研究所の事業内容—〉

大谷大学にとって多年の念願であった「真宗総合研究所」が6月1日から活動を始めた。昨年来この日のために旧洗心学寮が全面改装され、新しく生まれ変わった当研究所において、その日の午後開所式が行われた。新装なった建物の内部には、一階に、式典が行われた会議室はじめ、小会議室、所長室、主事室、受付兼事務室、応接室、資料室等があり、二階および三階に、大・小の研究室合わせて13室が準備されている。

式に際して、廣瀬杲学長は、この研究所が特に大谷大学において設置せられた意義について、教育と研究の根本理念から語り、多数の参列者に感動を与えた。そこで語られた研究所への期待と役割は、むしろ研究所だけでなく大学にとっての課題であり、研究所がいかに大学のこれまでの総意にもとづいて実現されたかが伺えよう。研究所は、それにそって今後の着実な実績が望まれているのである。

研究所での研究事業は、専任教員が専門分野の研究を遂行するのを助けんとする目的は当然ながら、それが同時に大谷大学としての研究・教育の理念を確認する総合化を目論む目的のものでなければならない。かつまた国際的学術交流を推進することを目的とした研究事業が必要であろうし、大学におけるいろいろな研究業績を社会へ公開する事業も考えられてゆくであろう。

研究所はそれらの研究事業を、内容によって次のように大別して行うのである。



指定研究のうちの特定研究とは、研究所の機構が全面的に関わって推進していく総合研究であり、その研究班の代表者は、常に学長がこれにあたるのである。研究所が設置せられた意義は、まさにこの総合研究の業績によって果されていくものとも考えられてよいのである。

今回の研究所の出発に際しては、すでに松原祐善前学長時代から「近代における真宗の展開」という課題のもとに共同研究班が組織されて、5年有余の実績を積んできた「真宗総合研究班」がそのままこの特定研究に指定せられ、今後の研究所での研究事業の中心になるよう再組織されようとしている。明治維新以後のいわゆる近代の展開における真宗の動向を、学内各分野の35名の先生方によって、いろいろな角度から検討し直す試みがなされてきた。この総合研究は、6年間のまとめの時期に丁度きており、研究所の開設によって、この秋から精力的に研究会が持たれる運びになっている。

それと同時に、この研究に関連した明治以後の特に教学に関係した史料の収集整理が、研究所における持続的に継続される作業となるよう計画されている。研究所の開所は、このような地道な作業の第一歩が踏み出されたといってもよいのである。

指定研究の委託研究とは、大学が関わる研究事業ではあっても、研究所の機構が特定研究の如く研究内容にまでは関わらないものをいう。この研究事業の代表者は学長または学長が委嘱した者であるが、事業の推進は組織せられた研究班によって独自に運営されるのである。研究所はそのためのいわば間接的な管理をするにすぎない。

このたびの研究所においては、「大谷大学大藏経学術用語研究会」が、この指定研究に認められた。この研究もすでに15年近く続けられており、高野山大学、駒沢大学、大正大学、龍谷大学、立正大学と本学の仏教系六大学の共同研究によって、大藏経の用語索引を編纂、出版しているものである。この研究に対しては、毎年、文部省の科学研究費が補助交付せられている。本年度は、「日本撰述華嚴宗関係典籍における学術用語の研究」という課題によって、華嚴経関係の日本典籍の研究へ引き継がれている。主に仏教学分野の諸先生が研究員となり、助手、大学院生諸君が毎日研究所へ通って、カード作成に専念している。

以上が指定研究であるが、次に一般研究とは、学内の専任教員によって自主的に立案されたプロジェクトにもとづく研究をいうのである。前の指定研究にしても同様であるが、研究所委員会の審議を経なければならないが、複数の先生方による(A)共同研究でも、単独の(B)個人研究

にしても、認められるかどうかは、学内公募に応じて提出された計画によって、その委員会審議を経て決定されるのである。

この一般研究は、現在の研究所ではまだ行われていない。この秋に公募され、来年4月から発足するはずである。というのはこの一般研究に関わる教員は、いわば学内留学的な性格をもって研究所へ出張してくるかたちをとるからである。つまり、教員としてのカリキュラム上の責任を極度に減じて、研究へ専念しうる態勢をとることが望まれるからである。

研究所構想の当初からあった学内意見の一つが、教育体制と研究体制との有機的連関ということである。そのあらわれが、研究所には、その研究所独自のそこでの専任たる所員は、一人も置かれていないということである。研究所が分立してしまうのではなく、研究所の研究体制とカリキュラム上の教育体制が、相互媒介的に連関するように配慮されてのことである。研究所における研究事業が、教育体制の現状にあらわれている多くの問題を解決していく方策になることが望まれているのであり、そのためにも、この一般研究のような研究体制の在り方が考えられているのである。

最後の客員研究員というのは、大谷大学へ国の内外から、いろいろなかたちで派遣せられてきた研修員を、研究所で受け入れる制度である。その一つが、一昨年来学術提携を行っている米国のウィスコンシン大学からの研修員に、大学内で十分に勉学できるよう研究所において便宜を与えているのである。

以上の研究事業の他に、研究所としては、公開講演会はじめ、研究紀要、研究叢書の刊行、公開講座等の企画が考えられつつある。

さらに特記しておくべきことは、前述の指定研究の一つに、国際的研究交流プロジェクトが計画されていることである。欧米における仏教研究は、近来、各大学において研究対象としてとりあげられ、専門的な研究者も増えつつある。その動向は、わが国における研究において看過できないものとなってきた。本学では今後もウィスコンシン大学だけでなく、他の諸大学との交流も盛んになるであろう。それらにおける本学の役割は大きく、それに充分に応じていかねばならない。そのための基礎的な試行を目論む研究作業が検討されつつあるのである。

いずれにしても研究所は出発したばかりである。現状は、理念はともかく具体的にはまだ決定的な方向は見定められていないと言ってもよい。現状での地道な活動が将来の大きな成果を生むものと確信するしかないのである。

大谷大学真宗総合研究所主事 武 田 武 麿 (『大谷大学広報』56-臨時号、1981年)

5. 刊行物

前節に述べるように、本学で行われる諸行事において開催する講演会などは、すべて一般公開を原則として行われてきた。しかし、当日参会し聴聞しえた人数には限りがあり、しかも京都に住しているものみにしかその機会は与えられない。

そこで本学ではこれらの講演や挨拶などのうち、主たるものを編纂して冊子を編集し、学外での公開講演会や、父母兄弟懇談会、あるいは大学見学者などに配布し、本学の日常活動の一端を理解してもらい一助としている。これらの活動は、仏教の社会への解放を志願とし、自己の信念の確立を求めた建学の理念を実現し、広く社会に敷衍する活動であると考えるのである。

同様に、学園祭において大学が主催して開催する「宗教シンポジウム」の記録も取りまとめて一冊としている。最近に刊行されたものの内容は次の通りである。

『傳統と創造 第8号』 1994（平成6）年3月刊行

あさきゆめみじ	寺川俊昭
無生を生きる	鍵主良敬
死生感—清沢満之と正岡子規—	神戸和麿
黒闇のどん底から光を仰ぐ	高史明
鈴木大拙における阿弥陀仏	坂本弘
現代社会と宗教教団	島蘭進
教養と宗教—独・英・日の比較—	野田宣雄
生と死をめぐる—ソシュールと東洋思想—	丸山圭三郎

『宗教と文化 第3輯』 1994（平成6）年2月刊行

人間として生きる—死と名号—

第1部 基調講演	宗秋月
	廣瀬 杲

第2部 質疑応答

自然と人間—悪をめぐる—

第1部 基調講演	小川一乗
	河合雅雄

第2部 質疑応答

イスラームと仏教—くらしの中の宗教—

第1部 基調講演	片倉もとこ
	福島光哉

第2部 質疑応答